博士論文

主格・属格交替に関する比較研究

A Comparative Study of Nominative-Genitive Conversion

国立大学法人　横浜国立大学大学院
環境情報学府

金銀姫
Yinji JIN

2014 年 **3** 月

博士論文

主格・属格交替に関する比較研究

A Comparative Study of Nominative-Genitive Conversion

金银姬
Yinji JIN

横浜国立大学大学院
環境情報学府・情報メディア環境学専攻
博士課程後期 **10TC904**

2014 年 **3** 月

Advisory Committee:
Prof. Roger Martin, Chair
Prof. Hiroshi Arisawa
Prof. Tomohiro Fujii
Prof. Naoyoshi Tamura
Prof. Tatsunori Mori
Prof. John Whitman
Prof. Hideki Maki

ABSTRACT

Nominative-Genitive Conversion (NGC) is the grammatical process in which Noun Phrases marked with Nominative Case alternate with Genitive Case in a certain set of environments. This dissertation conducts a comparative study of NGC within the Altaic languages by looking at Japanese, Late Middle Korean, Modern Korean, Yanbian Korean, and Turkish. It aims to elucidate the similarities and differences regarding NGC: while many languages classified in Altaic languages such as Japanese, Late Middle Korean, Yanbian Korean, and Turkish allow it, not all languages allow it, including Modern Korean. The dissertation also discusses the absence and presence of Transitivity Restriction effect on NGC.

要旨

理論言語学の領域では、ある種の従属節（関係節、名詞化従属節）において、格助詞の主格で標示される要素が属格でも標示されうる「主格・属格交替」と呼ばれる現象が注目され、しばしば取り上げてきた。「主格・属格交替」とは、日本語の例で説明すると、以下の関係節(1)で目的語が関係節化された場合に、主語が主格ガでも属格ノでも標示される現象である。この日本語の主格・属格交替には興味深い「他動性制約」という性質があると言われている。「他動性制約」とは、関係節(2b)で対格を伴う直接目的語が従属節に存在すると主格は属格に交替することができなくなる現象のことである(Harada 1971, Watanabe 1996)。

(1) a. [[昨日太郎が e_i 買った] 本 $_i$]

b. [[昨日太郎の e_i 買った] 本 $_i$]

(2) a. [[ジョンが 本を 買った] 店]

b. * [[ジョンの 本を 買った] 店]

他動性制約については様々な分析が提案されているが、多くの研究において主格が属格に標示される際に目的語が対格を得られないと分析している(Hiraiwa 2005)。生成文法の研究において主格・属格交替に関する最も大きな課題となるのは属格主語の認可であるが、他動性制約の性質を有するかどうかを明らかにするのが各言語の交替における格の認可のメカニズムを明らかにする上で一つの指標にもなる。

本博士論文では、既に主格・属格交替について日本語・中期朝鮮語・現代朝鮮語・トルコ語などで比較研究が行われてきた先行研究での知見を基に、主に中期朝鮮語を扱いながら、新たに延辺朝鮮語を加えて取り組んでいる。中期朝鮮語はハングルが開発される 15 世紀から 16 世紀にかけての朝鮮語であり、延辺朝鮮語は現在も中国の延辺朝鮮族自治州で暮らす朝鮮族によって話さ

れる朝鮮語の方言である。中期朝鮮語と延辺朝鮮語は共に声調体系がある言語である。中期朝鮮語の声調は文献において文字の横の点（傍点）によって表す。また、延辺朝鮮語は、アクセント体系があると言われている朝鮮語の二つの方言、慶尚道及び咸鏡道方言のうち、咸鏡道方言を話す話者が中心であり(Miyashita 1998)、アクセント体系がある言語として知られている。

本研究での内容は主に以下の三つに分類される。第一に、中期朝鮮語及び延辺朝鮮語に主格・属格交替の存在を検証する。第二に、日本語で存在が確認されている他動性制約について、中期朝鮮語と延辺朝鮮語の主格・属格交替で観察し、他動性制約の有無を検証し、制約が必ずしもどの言語でも見られるわけではないことを示す。即ち、延辺朝鮮語では日本語と同様に、他動性制約を有することが観察されるが、反対に中期朝鮮語の *-om* 名詞化従属節にはトルコ語と同様に他動性制約の影響が見られない例を観察する。第三に、中期朝鮮語及び延辺朝鮮語の主格・属格交替現象における他動性制約の有無に基づき、主格・属格交替現象における格の認可について分析を行う。

本論に入る前に、上記三つについて、簡単な説明を与える。最初に、中期朝鮮語では現代朝鮮語と違い、（「名詞化」を表す形態素-(w)om が使用されている）所謂 *-om* 名詞化従属節において、Jang (1995)の報告のように、主格・属格交替が存在することが再検証する。以下の(3)は中期朝鮮語に主格・属格交替が存在することを示している。

(3)　中期朝鮮語の主格・属格交替

a.　[UYKUN-i　CHENGCENGh-wom]-i　i-kotho-lssoy…

意根−主格　清浄する−名詞化−主格　このようだ−ので

「意根が清浄であることがこのようなので…」(月釋 17: 74a) (Suh 1977, (138))

b.　[UYKUN-uy　CHENGCENGh-wom]-i　ireho-lssoy…

意根−属格　清浄する−名詞化−主格　この−ようだ−ので

「意根の清浄であることがこのようなので…」(釋詳 19: 25a) (Suh 1977, (139))

現代朝鮮語では、属格が所有格としてのみ機能し、格認可を受ける属格は存在しないと Sohn (2004)が主張しているが、中期朝鮮語では、*-om* 名詞化従属節には所有の対象となる主要名詞がなく、(3b)の属格で標示される *UYKUN*「意根」が名詞化接尾詞*-om* を修飾できないため、現代朝鮮語とは違い、属格が所有格ではないことが明らかであり、所有格以外でも使用される。

次に、延辺朝鮮語では関係節でピッチアクセントによって主格・属格交替現象が生じる事実を観察する。延辺朝鮮語の格助詞の主格と属格は、共に分節音*-i* が使われるが、二つの格助詞はピッチアクセントで区別される。つまり、[名詞句-主格]の一体物のピッチアクセントは「H-型」であり、[名詞句-属格]のピッチアクセントは「L-型」である。「H-型」というはピッチアクセントに H(高)ピッチが必ず含まれることを指す。また、「L-型」とはピッチに L(低)ピッチが続くことを指す。例えば、(4)に見られるように、主節(4a)において、主格で標示される *aytuli* 「子供達」のピッチは HLL であり、属格（所有格）で標示される場合は LLL である。(5)の関係節内での主格・属格交替で *aytuli* 「子供達」は二種類のピッチアクセント(HLL, LLL)で発音されるが、(4)の主節で観察される主格と属格で標示される時のピッチアクセントにそれぞれ一致する。

(4)　延辺朝鮮語の主格及び属格におけるピッチアクセント

a.　ay-tul-i (HLL)/*(LLL)　　i-ss-ta (LHL).

子供-複数-主格　　いる-過去-終止

「子供達がいる.」

b.　ay-tul-i (LLL)/*(HLL)　　wos (H)

子供-複数-属格　　服

「子供達の服」

(5)　延辺朝鮮語の主格・属格交替

a.　[[caknyeney (LLH)　aytul-i (HLL)　mek-un (LL)]　paychay (HL)]

去年　子供達-主格　食べる-連体形.過去　白菜

「去年子供達が食べた白菜」

b.　[[caknyeney (LLH)　aytul-uy (LLL)　mek-un (LL)]　paychay (HL)]

去年　子供達-属格　食べる-連体形.過去　白菜

「去年子供達の食べた白菜」

(5)で見られる二種類のピッチアクセントは従属節の中でも関係節だけで観察されるものである。また、(5b)の属格(L-型ピッチ)で標示される名詞句 *aytuli* が副詞 *caknyeney*「昨年」の後にくる場合、名詞句の修飾語として主要名詞の *paychay*「白菜」を修飾することはできないので、所有格ではない。以上から延辺朝鮮語の関係節における二種類のピッチアクセントの交替は主格・属格交替現象によるものとして説明される。

さらに、中期朝鮮語及び延辺朝鮮語の主格・属格交替に日本語のように他動詞制約の性質があるかどうかを調査する。中期朝鮮語の *-om* 名詞化従属節において属格主語を含む節で対格を伴う直接目的語が存在することを観察したので他動性制約の性質がないことが分かったが、関係節では属格主語と対格を伴う直接目的語が共起する例が発見されず、他動性制約が影響を及ぼしていると推測される。また、延辺朝鮮語で対格を伴う直接目的語が関係節の中に現れる場合には属格主語（L-型ピッチ）は許されないことから、他動性制約の性質があると見ている。加えて、本研究では他動性制約を調査する中で中期朝鮮語と延辺朝鮮語の属格主語が対格を伴わない裸の目的語(bare object)と共起することを観察している。しかし、裸の目的語は一定の条件が満たされた場合に、名詞抱合(noun incorporation)し、対格を必要としないと分析できるので(Baker 1988, Yanagida and Whitman 2012)、他動性制約の性質において、裸の目的語が対格を伴う直接目的語と同様に分析できない場合があることについて指摘する。

最後に、本稿では主格・属格交替における他動性制約の性質から格の認可を課題に、日本語とトルコ語などと中期朝鮮語、延辺朝鮮語を比較し、他動性制約の影響について説明を行っている。他動性制約は一般的に主格が属格に標示される際に目的語が対格を得られないと分析され(Hiraiwa 2005)、目的語の認可には従属節に C という統語要素が関与していると分析されている(Miyagawa 2003, 2011)。延辺朝鮮語は、主格・属格交替において日本語と同じく他動性制約の性質があることから、延辺朝鮮語の属格主語を含む節には対格を認可する C が存在せず、反対に中期朝鮮語の *-om* 名詞化従属節はトルコ語に似て他動性制約の性質がないことから、トルコ語と同じく C が存在すると分析される。

謝辞

この論文を提出するに当たり大勢の方にお世話になり、お礼を申し上げます。まず、日頃からの言語学を指導し、博士課程において研究の指導だけでなく生活面でもサポートし、大きな支えとなる二人の先生、指導教員のマーティン・ロジャー先生と藤井友比呂先生に心から感謝を申し上げます。また、日本に留学する当初から最も長くお世話になり、研究に関する助言だけでなく、言語学の楽しさを教えて頂いた修士課程の指導教官でもある牧秀樹先生に深くお礼を申し上げます。この博士論文の中期朝鮮語や延辺朝鮮語に対する研究を最も応援して頂き、多忙の中でも長い間ご指導をしてくださったホイットマン・ジョン先生に心より感謝を申し上げます。

次に、延辺朝鮮語の調査に対して、貴重な資料、示唆に富む数々の貴重な助言などをくださった伊藤英人先生に心よりお礼を申し上げます。伊藤先生の研究室に所属する院生の高橋春人君に日頃から中期朝鮮語に対する疑問に答えて頂き、深く感謝致します。

研究室において、言語学を学ぶ際には先輩としてご指導など頂き、たくさんお世話になっている宗像孝先生、山下秀樹先生、林晋太郎君、遠山博隆君、長谷部めぐみさんに深く感謝致します。

この場をお借りして、中期朝鮮語などの勉強グループに参加させて頂き、半年間お世話になっているソウル大学の李賢熙先生に深くお礼を申し上げます。同じソウル大学の朴鎭浩先生に貴重な中期朝鮮語の資料やコーパスの利用を了承して頂いた上に、ご指導や貴重な助言などを頂き、深く感謝致します。

さらに、ここで母国の先生方々にお世話になり、感謝の気持を表したいです。交換留学生として、また国費留学生としても再び日本の大学院に入る際に大きな力になって頂いた、母校の電子科技大学外国語学院日本語科の李旭先生、王倩先生、小黒先生、その他の先生方々に深くお礼を申し上げます。また、延辺朝鮮語の調査の際に、アンケート調査に力を貸して頂いた母校の朝陽川一中の現在は龍井一中で教鞭を執る李海燕先生を始めとするその他大勢の先生方に深くお礼を申し上げます。

日本で家族のように暖かく迎えいれて頂き、2 年間奨学金の支援を頂いた 2590 地区米山国際ロ

ータリーの方々に心より感謝致します。カウンセラーの伊藤宏さんを始めとする横浜ロータリーの方々に長い間お世話になり、深くお礼を申し上げます。その他長い日本での留学生活で心の支えとなる親友、先輩の方々に感謝の気持ちを申し上げます。

この論文の審査員になって頂き、貴重な助言を頂いている諸先生方に深くお礼を申し上げます。

最後に、娘の夢を常に暖かく見守り、今日まで支えてくれた父と母に感謝します。兄の金日からも日頃心強い応援を頂き、感謝します。また、長い間応援をくださった大勢の親戚の方々に心より感謝致します。この感謝の気持ちが大学へ行くまで傍で支えてくれた祖母、祖父にも届くよう願います。

目次

ABSTRACT i
要旨 ii
謝辞 vii

第 1 章　導入 1

第 2 章　日本語の主格・属格交替 6

第 3 章　中期朝鮮語の主格・属格交替 8
3.1.　現代朝鮮語の主格・属格交替の非許可に関する分析 9
3.2.　中期朝鮮語の主格・属格交替 13

第 4 章　延辺朝鮮語のピッチアクセントから見る主格・属格交替 19
4.1.　延辺朝鮮語のアクセント体系及び先行研究 19
4.2.　主格語句及び属格語句のピッチアクセントにおける調査 22
4.3.　延辺朝鮮語の関係節における二種類のピッチアクセント 40
4.4.　延辺朝鮮語の主格・属格交替 50
4.5.　まとめ 54

第 5 章　中期朝鮮語及び延辺朝鮮語の他動性制約の現状 55
5.1.　他動性制約及びその本質 55
5.2.　中期朝鮮語の他動性制約における二面性 57
5.3.　延辺朝鮮語の他動性制約 60
5.4.　裸の目的語 65
5.4.1.　中期朝鮮語 65
5.4.2.　延辺朝鮮語の裸の目的語及び分析 67
5.4.3.　日本語の裸の目的語 73
5.5.　まとめ 74

第 6 章　中期朝鮮語及び延辺朝鮮語の他動性制約に関する理論的な説明 76
6.1.　仮説 76
6.2.　日本語及び延辺朝鮮語の他動性制約の分析 78
6.3.　中期朝鮮語の他動性制約の欠如の分析 86
6.4.　まとめ及び問題点 89

第 7 章.　帰結 91

影印・訳注本 92
参考文献 92

第 1 章　導入

本論文では、主に日本語・中期朝鮮語・現代朝鮮語・トルコ語における先行研究の知見に基づき、中期朝鮮語、延辺朝鮮語の主格・属格交替について精査し、両言語における主格・属格交替の特徴を明らかにすることを目的にする。理論言語学の領域において、主格・属格交替現象は長年アルタイ諸語で比較研究がなされている。具体的に説明すると、主格・属格交替は通常主格で標示される主格相当語句が、特定の従属節において属格で標示され、格助詞の主格が属格に交替する現象である。アルタイ諸語では関係節や名詞化従属節などの従属節で同現象が観察される。以下の(1)は日本語の関係節で観察される主格・属格交替の例であり、(2)はモンゴル語の関係節で観察される主格・属格交替の例である。また、(3)はトルコ語の *-dik* 名詞化従属節で観察される主語が属格で標示される例である。

(1)　a.　[[昨日僕 <u>が</u> 読んだ]　本]

　　b.　[[昨日僕 <u>の</u> 読んだ]　本]

(2)　モンゴル語（Maki et al. 2010）

　　a.　[[Öcügedür　Batu-∅　hudaldunab-gsan]　nom]

　　昨日　Batu-主格　買う-過去.連体形　本

　　「昨日 Batu が買った本」

　　b.　[[Öcügedür　Batu-yin　hudaldunab-gsan]　nom]

　　昨日　Batu-属格　買う-過去.連体形　本

　　「昨日 Batu の買った本」

(3)　トルコ語（Miyagawa 2011）

Ben-im　al-dığ-ım　at　iyi-dir

私-属格　買う-名詞化-1 人称　馬　いい

「私の買った馬はいい。」

以上のように、日本語、モンゴル語、トルコ語などにおいて主語が主格の代わりに属格で標示されうる。一方、現代朝鮮語では(4)で示しているように主格の代わりに属格で標示されることが許されず、主格・属格交替が存在しないとされる。先行研究において、Sohn (2004)は現代朝鮮語の属格で標示される名詞句（属格語句）は所有格としてふるまうことを示している。例えば、(5a)のように *ce sinsa*「あの紳士」は、*wos*「服」の所有者の解釈が可能になる場合に、属格で標示されるが、(5b)のように所有者の解釈ができない場合は、属格で標示することができないことから、属格が所有格であると主張している。

(4)　現代朝鮮語

a.　[ece　John-i　ilk-un　chayk]

昨日　ジョン-主格　読む-連体形.過去　本

「昨日ジョンが読んだ本」

b. *　[ecey John-uy　ilk-un　chayk]

昨日　ジョン-属格　読む-連体形.過去　本

「昨日ジョンの読んだ本」

(5)　現代朝鮮語

a.　[ce　sinsa-uy　ipu-n　wos]

あの 紳士-属格　着る-連体形.過去　服

「あの紳士の着た服」

b. *　[ce　sinsa-uy　ipu-n　sensayngnim-uy　wos]

あの 紳士-属格　着る-連体形.過去　先生-属格　服

「あの紳士の着た先生の服」

朝鮮語の主格・属格交替に関して、統語論における先行研究は、極めて少ない。現代朝鮮語を対象に調査した研究の中で最も影響力があるものとして Sohn (2004)があり、中期朝鮮語に関しては Jang (1995)が代表的な研究である。Jang の研究によると、中期朝鮮語には日本語と同様に主格・属格交替があることが報告されている。Jang の分析通り、中期朝鮮語に確かに主格・属格交替が存在するとしたら、現代朝鮮語でなぜ許されなくなったのかが大きな疑問になる。この問いは主格・属格交替における属格の認可とも直接関係するが、中期朝鮮語の先行研究では上記のことは詳細に検討されていない。

朝鮮語とは対照的に、日本語の主格・属格交替は、理論言語学で最も頻繁に研究されている現象でもあり、数多くの先行研究が挙げられる(Harada 1971, Saito 1982, Miyagawa 1993,2011, Watanabe 1996, Ochi 1999, Hiraiwa 2001,2005, Maki and Uchibori 2008 等)。Harada (1971)は日本語の主格･属格交替における主な特徴を明らかにしている。その後の研究では、主に Harada の観察を基に、理論面で属格の認可を巡って主格・属格交替が起きる統語環境について、詳細に精査されている。また、日本語の主格・属格交替には、方言や話者の年齢によって差が見られるが、一般的に、対格を伴う直接目的語が現れると主格・属格交替が許されないとされる他動性制約という性質があることが報告されている。一方、トルコ語では属格主語を含む例に対格を伴う直接目的語が現れうることから、他動性制約の影響が見られない(Kornfilt and Whitman 2011)。

このように属格主語が許される言語においても、他動性制約の性質が異なってくることは興味深いことである。上記の背景から、本論文では具体的に以下のことを取り組んでいる。

(6)　本稿での課題：

a.　中期朝鮮語及び延辺朝鮮語には主格・属格交替が確かに存在するのか。

b.　もし、対象言語に主格・属格交替が存在する場合、日本語と同様な性質（他動性制約）を有するのか。

c.　b の結果に対してどのような説明を与えるのか。

本稿では最初に中期朝鮮語及び延辺朝鮮語には、現代朝鮮語と異なり、主格・属格交替があることを明らかにする。中期朝鮮語において、関係節や*-om* 名詞化従属節（*-om* 節）などで、属格で標示される名詞句（属格語句）が、現代朝鮮語における所有格と同様に解釈できない例を提示し、中期朝鮮語には主格・属格交替が存在することを検証する。また、延辺朝鮮語では関係節における主語の二種類のピッチアクセントが、主格語句と属格語句で見られるピッチアクセントに一致することから、この主語の二種類のピッチアクセントが主格・属格に対応し、主格・属格交替により生じる現象であると主張する。次に、中期朝鮮語と延辺朝鮮語の主格・属格交替における他動性制約の性質について、対格を伴う直接目的語が両言語の属格主語を含む例で見られるかを観察し、他動性制約が必ずしもどの言語でも見られるわけではないことを明示する。即ち、延辺朝鮮語では日本語と同様に、他動性制約を有するが、反対に中期朝鮮語の*-om* 節にはトルコ語と同様、他動性制約を有しないことを示す。最後に、中期朝鮮語及び延辺朝鮮語の主格・属格交替現象における他動性制約の有無に基づき、主格・属格交替現象における格の認可について分析を行っている。

本論文の構成は以下の通りである。2 章では日本語の主格・属格交替が許される統語環境について説明する。3 章では現代朝鮮語に主格・属格交替が許されないという Sohn (2004)の分析に基づき、中期朝鮮語には Jang (1995)が結論づけているように主格・属格交替が存在することを検証

する。4 章では延辺朝鮮語の分節音が同じ(*-i*)である主格と属格について調査し、ピッチアクセントによってこの二つの格が区別できることを示す。その上で、関係節でおきる二種類のピッチアクセントが主格と属格に関するピッチアクセントに一致し、このピッチアクセントの変化が主格・属格交替によって起きる現象であると主張する。5 章では中期朝鮮語及び延辺朝鮮語の主格・属格交替において他動性制約を有するかどうかを調査する。中期朝鮮語では主に *-om* 節と関係節で主格・属格交替が許されるが、この二つの節は他動性制約について異なる観察をする。*-om* 節では対格を伴う直接目的語が属格主語と共起し、他動性制約を有するが、関係節では対格を伴う直接目的語が存在する例がなく、目的語が pro として具現し、存在する例が見つかったことから他動性制約の影響が及んでいると推測される。一方、延辺朝鮮語では、属格主語（L-型ピッチ）が対格を伴う直接目的語と同じ節に共起することができないことから、他動性制約があると見ている。この章では、両言語の主格・属格交替における、裸の目的語についても論じている。6 章では 5 章の観察から、日本語・トルコ語と比較し、中期朝鮮語及び延辺朝鮮語の主格・属格交替における属格の認可を仮定する。それから、それぞれの言語にいて他動性制約が存在する例と欠如する例について説明を行う。最後に 7 章では本稿をまとめる。

第２章　日本語の主格・属格交替

日本語の主格・属格交替はガ・ノ交替とも言われており、Harada (1971)を発端に、生成文法の枠組みに於いて、Saito (1982), Miyagawa (1993, 2011), Watanabe (1996), Ochi (2001), Hiraiwa (2001, 2006), Maki and Uchibori (2008)など数多くの先行研究がなされている。日本語のガ・ノ交替の生起条件は以下の通りである (Harada 1971)。(7)は関係節、(8)は主節、(9)はコト節、(10)はノ節、(11)はト節であるが、ガ・ノ交替が許されるのは、関係節、コト節、ノ節である。

(7)　a.　[[昨日僕が 読んだ] 本]

　　b.　[[昨日僕の 読んだ] 本]

(8)　a.　僕が 本を読んだ

　　b. *　僕の 本を読んだ

(9)　a.　太郎は[[昨日次郎が 来た]こと]を知らなかった。

　　b.　太郎は[[昨日次郎の 来た]こと]を知らなかった。

(10)　a.　太郎は[[昨日次郎が 死んだ]の]に驚いた。

　　b.　太郎は[[昨日次郎の 死んだ]の]に驚いた。

(11)　a.　太郎は[昨日次郎が 来た]と思った。

　　b. *　太郎は[昨日次郎の 来た]と思った。

Miyagawa (1993)は日本語のガ・ノ交替が許される統語環境について詳細に検討しており、日

本語のガ・ノ交替に必要な条件は、関係節、ノ節およびコト節などのように主要名詞が存在することであると指摘している。関係節(7)には主要名詞「本」があり、また、コト節(9)、ノ節(10)でも形式名詞「こと」、「の」があるが、主節(8)、ト節(11)には主要名詞が存在しないことが主格・属格交替が許されない原因と考えられる。加えて、Hiraiwa (2001)では主格・属格交替が一見主要名詞がない述語の連体形が生じる環境でもおきることを観察している。この議論に対しては、Maki and Uchibori (2008)では目に見えない主要名詞があるという分析が提案されている。朝鮮語では述語の連体形で必ず主要名詞が必要なため、日本語のガ・ノ交替に関する観察はこれ以上踏み込まないが、6 章では延辺朝鮮語の属格の認可について、以上のことを勘案して分析を行う。

また、日本語のガ・ノ交替には他動性制約という性質があり、Harada (1971)の観察を始め、Watanabe (1996), Hiraiwa (2001,2005)などで分析しているが、5 章において他動性制約の現象及びその本質について説明する。

第 3 章　中期朝鮮語の主格・属格交替

本章では中期朝鮮語の主格・属格交替が存在することを主張する。3.1 では現代朝鮮語に主格・属格交替が許されないとする Sohn (2004)の理論的な根拠である現代朝鮮語の属格語句は、関係節の主要名詞の所有者である場合だけに存在するという主張を概観する。3.2 では中期朝鮮語に主格・属格交替が存在する理論的な根拠として、*-om* 節、関係節、*-to* 節などでは属格語句が主要名詞の所有者でない事実をあげ、これらの属格語句が所有格ではないことを指摘する。

本題に入る前に、本論文の中で中期朝鮮語の主格・属格交替と呼んでいる概念、引用文献、収集方法について説明を行う。まず、中期朝鮮語の主格・属格交替の概念から説明すると、中期朝鮮語では、文献上、現代日本語のように全く同じ文で主格と属格の格交替が起きている例はないが、主格と属格の格交替の可能性を示すデータとして、多数の判例が記述されており、本研究ではそれらの例を提示している。ここで、やはり中期朝鮮語に主格・属格交替が存在することを証明するには、3.2 の理論的な説明が必要になる。

次に、引用文献に関しては、本文で扱うすべての中期朝鮮語のデータは 1443 年から 1592 年の間のものであり、本文の例は『釋譜詳節』(1447 年)、『月印千江之曲』(1447 年)、『月印釈譜』(1459 年)、『法華経諺解』(1463 年)、『杜詩諺解』(1481 年)、『南明集』(1482 年)、『三綱行実図諺解』(1481 年頃)などから引用している。

最後の中期朝鮮語のデータ収集方法については、中期朝鮮語の例文は関連する論文、歴史コーパスにおける検索、影本・注釈などの三つを用いて採集した。中期朝鮮語の属格で標示される主語（本文では属格主語ともいう）について朝鮮語学の研究分野では従属節で観察される属格で標示される主語という名で数多くの研究が行っている。本稿では、そのうちの Suh (1977), Kang (2000)などから多くのデータを引用している。また、歴史コーパスにおける検索は主に『釋譜詳節』、『杜詩諺解』の二つの文献から属格マーカー(*-uy*, *-oy*)を検索用語にし、属格で標示される名詞句をターゲットに調査を行った。最終的にそれらのデータは影本・釋注版を用いて現代語訳の

確認を行っている[1]。

3.1. 現代朝鮮語の主格・属格交替の非許可に関する分析

現代朝鮮語に主格・属格交替現象が存在しないと言われるが、その代表的な研究に Sohn (2004) が挙げられる。Sohn はまず現代朝鮮語にあたかも主格・属格交替のような例として、以下の (12-13)を用いている。

(12) a. [John-i ka-n iywu]
ジョン−主格 行く−連体形. 過去 理由
「ジョンが行った理由」

b. [John-uy ka-n iywu]
ジョン−属格 行く−連体形. 過去 理由
「ジョンの行った理由」

(13) a. [John-i ilhepeli-n cikap]
ジョン−主格 失くす−連体形. 過去 財布
「ジョンが失くした財布」

b. [John-uy ilhepeli-n cikap]
ジョン−属格 失くす−連体形. 過去 財布
「ジョンの失くした財布」

[1] 一部の影本（中期朝鮮語の初版）はその現代語の訳と共に載っている釋注版として発行されており、現代語に対応する意味を概ね確認することができる。データに誤訳がある場合は、すべて筆者の責任である。

以上の例において、*John* が主格-*i* と属格-*uy* で標示され、一見すると日本語の主格・属格交替のように見受けられる。しかしながら、Sohn は現代朝鮮語には日本語のような主格・属格交替は存在しないと主張する。その主な理由として、現代朝鮮語の名詞句に付く属格は、主要名詞の所有者の意味解釈になるときのみに許される点をあげている。その事実は以下の(14-15)の比較で捉えられる。

(14) a. [ce sinsa-ka ipwu-n wos]
あの 紳士−主格 着る−連体形. 過去 服
「あの紳士が着た服」

b. [ce sinsa-uy ipwu-n wos]
あの 紳士−属格 着る−連体形. 過去 服
「あの紳士の着た服」

(15) a. [ce sinsa-ka ipwu-n sensayngnim-uy wos]
あの 紳士−主格 着る−連体形. 過去 先生−属格 服
「あの紳士が着た先生の服」

b. * [ce sinsa-uy ipwu-n sensayngnim-uy wos]
あの 紳士−属格 着る−連体形. 過去 先生−属格 服
「あの紳士の着た先生の服」

(14)では *ce sinsa*「あの紳士」は主格と属格でも標示されることができるが、(15)では属格標示が許されない。その理由は(14b)で *ce sinsa-uy wos*「あの紳士の服」の意味解釈が可能であり、*ce sinsa* は主要名詞 *wos*「服」の所有者になれる。一方、(15b)では *ce sinsa* は主要名詞 *sensayngnim-uy wos*「先生の服」の所有者の解釈ができない。ここで *wos*「服」の所有者は *sensayngnim*「先生」であり、*ce sinsa* ではない。つまり、(15b)で *ce sinsa* は所有者の解釈が不可能であり、非文にな

るが、この事実は現代朝鮮語では所有格として機能している場合だけ、属格が用いられていることを意味する。

反対に、日本語の主格・属格交替においては、属格語句は現代朝鮮語のように所有者として解釈されない場合でも許される。以下の(16b)において、属格で標示される「ジョン」は「服」の所有者でない。

(16) a. [[ジョンんが着た] 山田先生の服]

b. [[ジョンんの着た] 山田先生の服]

次に、Sohn は属格語句が関係節より(17)のような名詞句で使用されるほうが自然であることを指摘している。(17a)で *John* は *Sinpwu*「嫁」を修飾し、*John-uy sinpwu*「ジョンの新婦」の意味に解釈できる。同じく（17b）でも *Mary* が *namca chinkwu*「彼氏」を修飾し、*Mary-uy namca chinkwu*「メアリの彼氏」という解釈になる。以上の例において属格語句は必然的に「所有者」としての解釈になる。言うまでもないが、ここで、*John*, *Mary* は主格で標示することができないので、主語ではない。

(17) a. [John-uy alumtawun sinpwu]

ジョン−属格 きれいな 新婦

「ジョンのきれいな新婦」

b. [Mary-uy cal sayngkin namca chinkwu]

メアり−属格 かっこいい 彼氏

「メアリのかっこいい彼氏」

さらに、Sohn は現代朝鮮語の属格語句は時間副詞 *ecey*「昨日」の後ろに置かれることができないことを観察する。以下の(18)の関係節では、副詞が文頭に置かれる場合に属格語句は許され

ないが、副詞が *John* の後ろに置かれる場合には許される。

(18) a.* [[ecey John-uy sa-n] chayk]

昨日 ジョン−属格 買う−連体形. 過去 本

「昨日ジョンの買った本」

b. [[John-uy ecey sa-n] chayk]

ジョン−属格 昨日 買う−連体形. 過去 本

「ジョンの昨日買った本」

(18a,b)の対比から属格で標示される *John* は関係節の中でなく、Spec, DP に基礎生成していることになる。もし、(18a)で *John* が IP に置かれる時間副詞 *ecey*「昨日」の後ろにくるのであれば、「昨日」と同じく IP 領域にいることになり、主要名詞 *chayk*「本」を修飾できないが、(18b)では時間副詞 *ecey* が *John* の前にくることで、IP より上の Spec, DP に置かれ、主要名詞を修飾することができる。

以上の Sohn の観察から現代朝鮮語の属格語句は、関係節の外側の Spec, DP に基礎生成していることが推測される。なお、現代朝鮮語の属格語句(14b)は以下の(19)のような句構造である。(19)の句構造において、属格語句 *ce sinsa* は Spec, DP に基礎生成し、それと同じ指標をもつ pro が関係節の内部にいることになる。

(19) 現代朝鮮語

$[_{DP}$ ce sinsa-Gen$_i$ $[_{NP}[_{CP/TP}$ *pro*$_i$ ... ipwu- T/C $]_N$ wos] D]

現代朝鮮語の事実とは対照的に、日本語では属格語句は副詞が前置しても許される。以下の(20)では属格で標示される「太郎」の前には副詞「昨日」が前置しても文は文法的であり、ここで「太郎」は少なくとも Spec, DP へ顕在的(overt)に移動していないことが分かる。日本語の属格主語は

時間副詞の後にくることから IP 節の中にいることができ、現代朝鮮語のように Spec, DP に置かれなくても許される。

(20) a. [[昨日太郎が 買った] 本]

b. [[昨日太郎の 買った] 本]

日本語の事実について Miyagawa (1993)では、日本語の属格主語は、埋め込み節の外側の D と素性照合のため、LF で Spec, DP に移動することを主張している。なお、日本語の属格構文(20b)を図式化すると(21)のようになる。

(21) 日本語 (Miygawa 1993)

$[_{DP}$ Spec $[_{NP}[_{CP/TP}$ 昨日 太郎の V T/C] N 本] D]

LF 移動

以上の(21)において日本語の属格主語は認可過程において、LF で Spec, DP に移動しているが、現代朝鮮語の属格語句は Spec, DP に基礎生成しており、主格語句との「交替した属格」ではなく、日本語のような主格・属格交替が現代朝鮮語に許されないことが明らかである。

3.2. 中期朝鮮語の主格・属格交替

中期朝鮮語の属格で標示される名詞句は現代朝鮮語とは違い所有者でない場合がある。Jang (1995)が Suh (1981)の研究に基づき、中期朝鮮語において属格主語が許されると指摘している。まず、以下(22-23)の *-om* 節で Jang の主張のサポートになるデータを提示する[2]。

[2] 中期朝鮮語は漢字とハングル文字が混ざっており、漢字は大文字で表記する。すべての例の日本語訳は、筆者が付けたものであるが、漢字はなるべく元の文献に基づき、訳している。

(22) a. [UYKUN-i CHENGCENGh-wom]-i i-kotho-lssoy…

意根−主格 清浄する−名詞化−主格 このようだ−ので

「意根が清浄であることがこのようなので…」(月釋 17: 74a) (Suh 1977, (138))

b. [UYKUN-uy CHENGCENGh-wom]-i ireho-lssoy…

意根−属格 清浄する−名詞化−主格 この−ようだ−ので

「意根の清浄であることがこのようなので…」(釋詳 19: 25a) (Suh 1977, (139))

(23) a. [...WI SINLYEK-i WOYWOY h-wom]-i i-kotho-nira.

. . . 威神力−主格 強い−名詞化−主格 この−ようだ−終止

「. . . 威神力が強いのがこのようだ。」(法華 7:59b)

b. [...WI SINLYEK-oy WOYWOY h-wom]-i ileho-nila.

. . . 威神力−属格 強い−名詞化−主格 このようだ−終止

「. . . 威神力の強いのがこのようだ。」(釋詳 21:6b)

(22)で主題 *UYKUN*「意根」は主格 *-i* と属格 *-uy* で標示され、(23)で *WISINLYEK*「威神力」が主格 *-i* と属格 *-oy* で標示されている。(22-23)において属格語句は副詞が前置しておらず、現代朝鮮語と同じく所有者である可能性がある。しかしながら、主要名詞が欠けている *-om* 節で、属格に標示される名詞句は所有者として解釈することができない[3]。また、上記の例は主格構文と属格構文が極めて似ているので、本研究では主格・属格交替の現象と見なす。

次に、中期朝鮮語は、主要名詞が存在する関係節に含まれる属格語句が主要名詞の所有者の解釈としての意味がない場合でも許される例を見る。

[3] 中期中世朝鮮語では *-om* は名詞化語尾であるが、英語の動名詞 *-ing* のようなものである。これに当てはまるのは現代朝鮮語の *-um* であるが、詳しくは Yoon 1996 を参照されたい。

(24) a. [[WUCENWANG-i moyngkol-wo-n] KUMSANG]-ol...

優塡王−主格 作る−WO−連体形. 過去 金像−対格

「優塡王が作った金像を…」 (釋詳 11:13a)

b. SALIPUL-i [[SWUTAL-oy moyngkol-wo-n] CWA]-ey wolla an-kenul...[4]

舍利弗−主格 須達−属格 作る−WO−連体形. 過去 座−処格 上がり座る−と

「舍利弗が須達の作った座に上がり座ると…」(釋詳 6:30a)

(25) a. [PIKWU-i cwuk-ulq] SICEL]-ey

比丘−主格 死ぬ−連体形. 将来 時節−に

「比丘が死ぬ時節に」(釋詳 19:31b) (Suh 1977, (126))

b. [i CWUNGSANG-oy na-l] SICEL]-wa

この 衆生−属格 生まれる−連体形. 将来 時節−と

cwuk-ulx SICEL

死ぬ−連体形. 将来 時節

「この衆生（生き物）の生まれる時節と死ぬ時節」(釋詳 19:22) (Kang 2000, 237)

(24-25)の関係節では、主格と属格が許され、主格・属格交替である可能性が高い。(24a)の関係節で *WUCENWANG*「優塡王」は主格*-i* で標示され、(24b)で *SWUTAL*「須達」が属格*-oy* で標示される。また、(25a)では *PIKWU*「比丘」が主格*-i* で標示され、(25b)では *i CWUNGSANG*「この生き物」が属格*-oy* で標示される。また、以上の例で主格構文と属格構文は類似しており、対をなしている。まず、(24a,b)は述語が *moyngkol-*「作る」であり、主要名詞が *CWA*「座」、*KUMSANG*「金像」と名詞句である。(25a,b)では述語が *na-*「生まれる」、*cuk-*「死ぬ」であり、主要部が同

[4] 中期朝鮮語の*-wo/wu-*はいくかの用法があり、例文ではグロスとして残して置くが、本稿ではそれについて深く議論しない。詳細な用法については、Ko (2010)などを参照されたい。

じ名詞句 *SICEL*「時節」であり、ほぼ類似する。さらに、これらの例文は同じ文献（『釋譜詳節』）で見つかっている。しかしながら、これらの例では副詞を前置していないことから、現代朝鮮語の属格語句と同様に Spec, DP に基礎生成している可能性が残されている。ただし、関係節(24b)で *SWUTAL*「須達」が *CWA*「座」の所有者の解釈が可能だとしても、(25b)では *i CWUNGSANG*「衆生」が *SICEL*「時節」の所有者としての解釈はできない。なぜなら、(24b)でおそらく *SWUTAL-oy CWA*「須達の座」の意味解釈は可能であるが、(25b)では *i CWUNGSANG*-oy *SICEL*「衆生の時節」という意味解釈はできないのでこの属格は所有格として機能していないことになる。なお、中期朝鮮語の関係節でも属格語句は現代朝鮮語のような所有者の解釈ができなくても許される。

さらに、中期朝鮮語の属格語句は関係節の主要名詞が形式名詞の場合でも許される。以下の(26-27)の-*to* 節の例を考えよう。

(26) a. SEYCWON-i [[SWUTAL-i wo-l] -tto]-l al-osi-kwo…

世尊−主格 須達-主格 来る−連体形−形式名詞−対格 知る−敬語−接続

「世尊が須達が来ることを知り…」(釋詳 6:20b) (Suh 1977, (125))

b. [[KASEP-uy wo-lq]-to]-l al-osy-a…

迦葉−属格 来る−連体形−形式名詞−対格 知る−敬語−接続

「(彼が)迦葉の来ることを知り…」(月印 53b) (Suh 1977, (132))

(27) [[ku pskuy CEYCA-i api-uy PYENANhi anco-n]-to]-l

その 時 諸子−主格 父−属格 気楽に 座る−連体形. 過去−形式名詞−対格

al-wo...

知る−接続

「その時て諸子(弟子)が父の気楽に座ることを知り…」 (法華 2:138b)

(26)で主格構文と属格構文は動詞が同じ *wo*-「来る」主要名詞が形式名詞-*to/tto* である点において、類似している[5]。(26a)では *SEYCWON*「世尊」が主格-*i* で標示され、(26b)で *KASEP*「迦葉」が属格-*uy* で標示されている。また二つの関係節には形式名詞-*to/-tto* がある。(27)は形式名詞-*to* 節における属格構文であり、*api*「お父さん」が属格-*uy* で標示され、節の中には副詞 *PYENANhi*「楽に」も含まる。(26b)と(27)の属格語句の前には副詞がいないが、現代朝鮮語と同じく Spec, DP に基礎生成しない。なぜなら形式名詞-*to* は動詞のすぐ後ろにしか使用されず、*KASEP-uy-to*、または *api-uy-to* という意味解釈ができないからである。

属格語句が形式名詞-*kes* が主要名詞になる関係節で許される場合は、属格語句が Spec, DP に基礎生成している可能性がある。以下(28-29)の例を考えよう。

(28) i TWONGSAN$_i$-on [[SWUTAL-oy e_i sa-(wo)n] kes]-i-wo.[6]

この東山−主題 須達−属格 買う−WO−連体形. 過去 形式名詞−接尾詞−終止

「この東山（公園）は須達の買ったものである。」 (釋詳 6:39b)

(29) [[CHWUKSAYNG-oy *pro*$_i$ nah-wo-n] kes$_i$]-i-lssol...

畜生−属格 産む−WO−連体形. 過去 形式名詞−接尾詞−ので

「畜生（動物）が産んだので…」 (釋詳 11:31a)

(28)で *SWUTAL*「須達」は属格-*oy* に標示され、形式名詞-*kes* は話題化になる前の目的語 *TWONGSAN*「公園」を指すが、ここで、*SWUTAL-oy kes*「須達のもの」という意味解釈が可能である。また、(29)でも *CHWUKSAYNG*「動物」は属格-*oy* で標示され、形式名詞-*kes* は pro, 即ち *CHWUKSAYNG* が「産む」対象の「赤ちゃん」を指し、*CHWUKSAYNG-oy kes*「動物の赤ちゃん」という意味解釈は可能になる。

---

[5] 中期朝鮮語の形式名詞については Ko (2000), 72 を参考にしている。

[6] 動詞 *sa*-「買う」は上声で実現しているので、-*wo/wu*-の付いた形式である。

これまでの例を表 1 でまとめると、*-om* 節(22-23)、関係節(25)、*-to* 節(26-27)などで観察される属格語句は所有者ではなく、関係節(24)及び *-kes* 節(28-29)ではそれが可能である。この事実から中期朝鮮語の属格語句は現代朝鮮語とは違い、Spec, DP に基礎生成していないことが判明される。したがって中期朝鮮語には主格・属格交替が存在することが再確認され、Jang (1995)での結論を補強することになる。

表 1.　意味解釈における諸構文の属格語句の所有者としての可能性

	-om 節	関係節	*-to* 節	*-kes* 節
所有者	不可能	可能・不可能	不可能	可能

第 4 章　延辺朝鮮語のピッチアクセントから見る主格・属格交替

延辺朝鮮語は中国吉林省東部にある朝鮮族自治州で暮らす朝鮮族が話す言葉である[7]。本章では延辺朝鮮語のピッチアクセントによって示される主格・属格交替現象について議論する。まず、4.1 では延辺朝鮮語に関する先行研究に基づき、延辺朝鮮語のアクセント体系について概説する。次に、4.2 では延辺朝鮮語の主格と属格は同じく分節音 *-i* であり、基本的に、ピッチアクセントに(H)ピッチが必ず含まれる「H-型」と(L)が続くピッチアクセントである「L-型」の二種類のピッチアクセントでしか区別できないことを示す。具体的には、[名詞句-主格]が一体となった要素のピッチアクセントは「H-型」であり、[名詞句-属格]が一体になった場合、ピッチアクセントは「L-型」であり、主格語句と属格語句が区別される。4.3 では、関係節で主語として機能する名詞句が二種類のピッチアクセントによって区別され、発音されることを観察し、それぞれのピッチアクセントが主格と属格に付随される時のピッチアクセントに一致することから、主格・属格交替によるものと主張する。4.4 では、延辺朝鮮語の属格語句（L-型ピッチ）は「交替した属格」の結果、生じたものであることを検証し、主格・属格交替があるという主張の裏付けを行う。最後に、4.5 でこの章をまとめる。

4.1.　延辺朝鮮語のアクセント体系及び先行研究

延辺語朝鮮語のアクセントに関する研究には、Ramsey（1978)、梅田（1993)、全（1998)、朴(2000)、車（2004)、池（2012)などが挙げられるが、以下に以上の先行研究を簡単に概括する[8]。まず、梅田（1993)は、延辺朝鮮語の音韻的な特徴について記述し、延辺朝鮮語に高低アクセントの音韻体系があると主張している。また、全（1998)では、中期朝鮮語と延辺朝鮮語を比較し、中

[7] 本論文の延辺朝鮮語は延吉・龍井市の母語話者による発話及び内省に基づいている。
[8] 延辺朝鮮語の漢字外来語について、Ito and Kenstowicz (2009)などで研究される。

期朝鮮語の語彙項目と延辺朝鮮語の言葉の対応関係を調べ、中期朝鮮語の傍点の本質を辿ろうとしている。さらに、朴（2000)では延辺朝鮮語の名詞複合語のアクセントについて調査し、Ramsey (1978)で提案している複合語の構成要素である名詞のアクセントにおける規則（「名詞複合語アクセント規則」）が適応されることを確認している[9]。同じく、車（2004)でも、延辺朝鮮語の複合語のアクセントについて調査し、朴（2000)の主張に一致している。最後に、池（2012)では、述語連体形におけるアクセントの変動を考察し、述語連体形においても名詞複合語で観察されるアクセント規則が当てはまることを指摘している。池（2012)の主張は関係節の述語及び主要名詞のアクセントに深く関連しているので、4.3 で詳細に取り上げる。

以下に、延辺朝鮮語のアクセント体系について、朴（2000)、全（1998)などに基づき、簡単に概説する。延辺朝鮮語には高(H)、低(L)の二つのピッチアクセントがあり、高低によって語の意味が区別される。例えば 1 音節の mar「言葉」は(H)ピッチであり、mar「馬」は(L)ピッチである。さらに、以下(30-32)では 1 音節、2 音節及び 3 音節の名詞のアクセントパターンとそれに該当するいくつかの語彙の例を提示している。動詞のアクセントパターンも基本的に名詞と同じであり、(33-34)で 1 音節及び 2 音節の動詞（語幹）のアクセントパターンに該当する語彙の例を掲載する。以下の例は朴（2000)、池（2012)からの引用である[10]。

・名詞のピッチアクセントのパターン

(30)　1 音節

　　a.　H 型: már 言葉、sɛ́ 鳥、s’ár 米、páp ご飯

　　b.　L 型: mar (-i) 馬

---

[9] 「名詞複合語アクセント規則」とは、複合語の構成要素である名詞のピッチアクセントが一番右のものを除いて全部除去されることを指す。

[10] 朴（2000)では名詞のピッチアクセントのパターンを示す際に、一音節以上のピッチアクセントが L-型(L が続く)の語彙は助詞がない場合は、L…LH にとして実現されるため、助詞をつけて確かめる必要があることを指摘している。したがって、(30-32)でピッチアクセントが L-型の語彙の後ろには主格 *-i* を付け加えている。

(31)　2 音節

a.　HL 型：kámɛ つむじ、 pɛ́chɛ 白菜、ɛ́tul 子供たち

b.　LH 型：kamɛ́ 釜、tɛcí 豚、tarí 脚

c.　LL 型：kasɨ (-i) 秋、palam (-i) 風

(32)　3 音節

a.　HLL 型：hútemi 継母

b.　LHL 型：apái お祖父さん

c.　LLH 型：k’ak’urɛ́ けち

d.　LLL 型：kamutan (-i) 歌舞団

・動詞の語幹のピッチアクセントのパターン

(33)　1 音節

a.　H 型：s’ú- 使う、pá- 掘る

b.　L 型：ka- 行く、cu- あげる、ha- する

(34)　2 音節

a.　HL 型：nwúlu- 押す、náo-出る、t’éna- 去る

b.　LH 型：manná- 会う、tatúm- 整える

c.　LL 型：palu- 塗る、pucap- 捕まる

4.2. 主格語句及び属格語句のピッチアクセントにおける調査

延辺朝鮮語の主格と属格は同じ分節音*-i* であり、主格と属格の二つの文法格を容易に区別できない。したがって、本節ではその二つの文法格を区別するために、以下に示す調査を行う。調査内容は人称代名詞・1 音節・2 音節・3 音節のアクセントパターンによって区別される名詞が、(35)の異なる統語環境で、{NP1, NP2, NP3, NP4} として現れた時に出現する $NP_{1, 2, 3, 4}$（-助詞）のピッチアクセントを比較し、主格及び属格におけるピッチアクセントの変化を観察することである。NP 1 は必ず主節の主語として主格がつく環境に置かれるのに対し、NP2 は後ろに名詞句がくることから属格（所有格）が現れる環境に置かれている。さらに、本節では NP1 と NP2 のピッチアクセントの変化を正確に捉えるために、比較として主節の目的語になる NP3 と話題化構文における名詞句の NP4 のピッチアクセントも調査する。尚、NP1 と NP4 は主節の主語という点で同じだが、話題化の時は助詞が落ちることはなく、話題を示す助詞（話題マーカー）*-nu/-unu* が現れ、格助詞で区別される。

(35) A. [NP1-NOM + VP]

B. [NP2-GEN + NP]

C. [(Subject) + NP3-Acc + V]

D. [NP4-Top + …+ V]

それでは、最初に人称代名詞が以下の(35)のような環境で、ピッチアクセントがどうなるか示す。以下の(36)は 1 人称の例であり、(37)は 2 人称の例である。

(36)　1 人称

a.　nay (H)/*(L)　chayk-u (HL)　sa-ss-ta (HL).

私. 主格　本−対格　買う−過去−終止

「私が本を買った。」

b.　nay (L)/*(H)　chayk (H)

私. 属格　本

「私の本」

c.　na-lu (HL)　ttayly-ess-ta (LHL).

私−対格　殴る−過去−終止

「私を殴った。」

d.　na-nu (HL)　hankwuk-ey (HLL)　ka-n-ta (HL).

私−話題　韓国−へ　行く−将来−終止

「私は韓国へ行く。」

(37)　2 人称

a.　ni (H)/*(L)　chayk-u (HL)　sa-ss-ni (HL)?.

君. 主格　本−対格　買う−過去−終止

「君が本を買ったの？」

b.　ni (L)/*(H)　chayk (H)

君. 属格　本

「君の本」

c.　ne-lu (LH)　ttayli-te-y (LLH)?

君−対格　殴る−過去−疑問

「君を殴ったの？」

d.　ne-nu (LH)　mikwuk-ey (HLL)　ka-ni (HL)?

君−話題　アメリカ−へ　行く−疑問

「君はアメリカへ行くの？」

既に述べたが、延辺朝鮮語の主格と属格は同じ分節音 *-i* であり、人称代名詞及び母音で終わる語彙は表面的に格助詞が付いてないように見える場合がある。尚、主格と属格が付く場合は主にピッチアクセントについて記述する。(36)において、1 人称代名詞 *nay*「私」は、主格が付く時はピッチ（アクセント）が(H)であり、属格が付く時はピッチが(L)である。さらに、目的語の場合、対格 *-lu* が付き、ピッチは(HL)である。話題化構文では、話題マーカー *-nu* が付き、ピッチは(HL)である。次に、(37)において 2 人称の代名詞 *ni*「君」は、主格が付く時はピッチが(H)であり、属格が付く時はピッチが(L)である。さらに、対格と話題マーカーが付く時はピッチが共に(LH)である。ここで一点付け加えると、主格と属格のピッチアクセントは（*）で表示されているように、それぞれが対応する決まったピッチアクセントでしか発音できないことである。以下すべての例においても同じことが該当される。

又、延辺朝鮮語には成人になるぐらいの話者が使用し始め、同年代または年下に向けて用いる2人称代名詞 *cey*「あなた」があるが、ピッチアクセントにおいては、以下(38)で示しているように、2人称代名詞 *ni* (L)「君」と類似している[11]。

(38) a. cey (H)/*(L) cip-u (LH) pa-wo (HL)?
あなた. 主格 家−対格 売る−疑問
「あなたが家を売るの?」

b. cey (L)/*(H) cip (L)
あなた. 属格 家
「あなたの家」

c. ce/cey-lu (LH/LH) ttayly-ess-sswo (LLH)?
あなた−対格 殴る−過去−疑問
「あなたを殴ったの？」

d. ce/cey-nu(LH/LH) ka-wo (HL)?
あなた−話題 行く−疑問
「あなたは行くの？」

(38)で2人称の *cey*「あなた」に主格が付く時はピッチが(H)である。一方、属格が付き時はピッチが(L)である。また、対格と話題マーカーが付く場合は、ピッチが同じく(LH)である。

続いて、疑問代名詞 *nwuki*「誰」について示す[12]。

[11] *cey*「あなた」は目的語、主題化になる時は、*ce* にも言える。
[12] 疑問代名詞 *nwuki* は場合によって不特定若しくは特定の人物を指すことができる。話題化構文(79d)では特定人物を指す意味で使用される。

(39)　疑問代名詞

a.　nwuki (HL)　　cip-u (LH)　　sa-ss-ni (HL)?

誰. 主格　　家−対格　　買う−過去−疑問

「誰が家を買ったの？」

b.　nwuki (HL)　　cip-i-ya (LHL)?

誰. 属格　　家−接尾詞−疑問

「（これは）誰の家なの？」

c.　nwuki-lu (HLL)　ttayly-ess-ni (LHL)?

誰−対格　　殴る−過去−疑問

「誰を殴ったの？」

d.　nwuki-nu (HLL)　wo-n-ta (HL).

誰−話題　　来る−将来−終止

「あの人は来るよ。」

(39)の疑問代名詞 *nwuki*「誰」は、主格と属格が付く場合にピッチが同じく(HL)である。さらに、対格及び話題マーカーが付く場合は、ピッチが(HLL)である。

次に、1 音節、2 音節及び 3 音節の名詞を対象にして考察する。最初に 1 音節の例を提示する。以下(40)は 1 音節のアクセントパターンによって選んだ語彙項目であり、(41-42)はその語彙を用いた例である。

(40)　1 音節

a.　H 型: ssal 米

b.　L 型: mal 馬

(41) ssal (H) 米

a. ssal-i (HL)/*(LL) mas iss-ta (HLL).

米−主格 おいしい−終止

「米がおいしい。」

b. ssal-i (LL)/*(HL) mas (H)

米−属格 味

「米の味」

c. ssal-u (HL) sa-ss-ta (HL).

米−対格 買う−過去−終止

「米を買った。」

d. ssal-unu (HLL) iss-ta (LL).

米−主題 ある−終止

「米はある。」

(42) mal (L) 馬

a. mal-i (LH)/*(LL) khu-ta (HL).

馬-主格 大きい-終止

「馬が大きい。」

b. mal-i (LL)/*(LH) saykkal (HL)

馬-属格 色

「馬の色」

c. mal-u (LH) sa-ss-ta (HL).

馬-対格 買う-過去-終止

「馬を買った。」

d. mal-unu (LHL) iss-ta (LL).

馬-主題 いる-終止

「馬はいる。」

(41)において、1 音節の *ssal* (H)「米」は、主格が付く場合にピッチは(HL)であるが、属格が付く場合にはピッチが(LL)である。また、対格と話題マーカーが付く場合にピッチはそれぞれ(HL), (HLL)である。(42)において、*mal* (L)「馬」は、主格が付く場合にピッチが(LH)であり、属格の場合には(LL)である。さらに、対格と話題マーカーが付く場合にはそれぞれのピッチが(LH), (LHL)である。

次に、母音で終わる 1 音節の例を扱う。興味深いことに、標準語では母音で終わる語彙には必ず主格 *-ka* が付くが、延辺朝鮮語では以下の母音で終わる語彙にも主格 *-i* が付く。以下に母音で終わる語彙 *pa* (H)「縄」、*khwo* (H)「鼻」の例を提示する[13] [14]。

[13] 延辺朝鮮語で *pwo*「風呂敷」も主節の主語になる時に *-i* がつき、*pwo-i* (LL)になる。

[14] 上記の語彙は、(43-44)の話題化構文で示しているように *pa-nu* (HL), *khwo-nu* (HL)よりは *pai-nu* (HLL), *khwoi-nu* (HLL)になり、話題マーカーの前に *-i* があるほうがより自然である。

(43)　1 音節の母音で終わる語彙：pa (H) 縄

a.　pa-i (HL)/*(LL)　　kil-ta (HL).

縄-主格　　長い-終止

「縄が長い。」

b.　pa-i (LL)/*(HL)　　saykkal (HL)

縄-属格　　色

「縄の色」

c.　pa-lu (HL)　　sa-ss-ta (HL).

縄-対格　　買う-過去-終止

「縄を買った。」

d.　pai-nu (HLL)　　cip-ey (LH)　　i-ss-ta (LL).

縄-話題　　家-処格　　ある-過去-終止

「縄は家にある。」

(44)　1 音節の母音で終わる語彙：khwo (H) 鼻

a.　khwo-i (HL)/*(LL)　　khu-ta (HL).

鼻-主格　　大きい-終止.

「鼻が大きい。」

b.　khwo-i (LL)/*(HL)　　saykkal (HL)

鼻-属格　　色

「鼻の色」

c.　khwo-lu (HL)　　ttayly-ess-ta (LHL).

鼻-対格　　殴る-過去-終止

「鼻を殴った。」

d.　khwoi-nu (HLL)　iss-ta (LL).

鼻-話題　　ある-終止

「鼻はある。」

(43-44)において、*pa* (H)「縄」、*khwo* (H)「鼻」は、主格が付く場合にピッチが両者共に(HL)である。属格が付く時には、両者のピッチが(LL)である。また、これらの語彙に対格と話題マーカーが付く場合は、ピッチが共に(HLL)である。

続けて、2 音節の例を提示する。以下の(46-48)は、(45)で示される 2 音節のアクセントパターンに基づいて選んだ語彙で作られた例である。

(45)　2 音節

a.　HL 型: actual 子供達

b.　LH 型: tayci 豚

c.　LL 型: palam 風

(46) aytul (HLL) 子供達

a. ay-tul-i (HLL)/*(LLL) wos-u (HL) ip-ess-ta (LHL).

子供−複数−主格 服−対格 着る−過去−終止

「子供達が服を着た。」

b. ay-tul-i (LLL)/*(HLL) wos (H)

子供−複数−属格 服

「子供達の服」

c. ay-tul-u (HLL) ttayly-ess-ta (HL).

子供-複数-対格 殴る-過去-終止

「子供達を殴った。」

d. ay-tul-unu (HLLL) cip-ey (LH) i-ss-ta (LL).

子供-複数-話題 家-処格 いる-過去-終止

「子供達は家にいる。」

(47) tayci (LH) 豚

a. tayci (LH)/*(LL) paychay-lu (HLL) mek-ess-ta (LHL).

豚-主格 白菜-対格 食べる-過去-終止

「豚が白菜を食べた。」

b. tayci (LL)/*(LH) saykkal (HL)

豚-属格 色

「豚の色」

c. tayci-lu (LHL) sa-ss-ta (HL).

豚-対格 買う-過去-終止

「豚を買った。」

d. tyci-nu (LHL) iss-ta (LH).

豚-話題 いる-終止

「豚はいる。」

(48)　palam (LL)　風

a.　palam-i (LLH)/*(LLL)　　pwul-ess-ta (LHL).

風-主格　　吹く-過去

「風が吹いた。」

b.　palam-i (LLL)/*(LLH)　　him (H)

風-属格　　力

「風の力」

c.　palam-u (LLH)　　mak-ass-ta (LHL).

風-対格　　防ぐ-過去-終止

「風を防いだ。」

d.　palam-unu (LLHL)　　pwul-ci an-nun-ta (HL.HLL).

風-話題　　吹く-否定-現在-終止

「風は吹かない。」

(46)で *aytul* (HL)「子供達」は、主格が付く時にピッチは(HLL)であり、属格が付く時には(LLL)である。また、対格と話題マーカーが付く時に、ピッチがそれぞれ(HLL), (HLLL)である。(47)で *tayci* (LH)「豚」の場合は、主格が付く時にピッチが(LH)であり、属格が付く時には(LL)である。また、対格及び話題マーカーが付く場合はピッチが両者共に(LHL)である。最後に、(48)で *palam* (LL)「風」は、主格が付く時にピッチが(LLH)であり、属格が付く時には(LLL)である。また、対格と話題マーカーが付く時には、それぞれ(LLH), (LLHL)である。

最後に、3 音節を挙げる。以下の(50-53)は、(49)で示される 3 音節の語彙を用いた例である。

(49) a. HLL 型: hwuteymi 継母

b. LHL 型: apai お祖父さん

c. LLH 型: kkakkwulay けち

d. LLL 型: kamwutan 歌舞団

(50) hwuteymi (HLL) 継母

a. hwuteymi (HLL)/*(LLL) ku (L) a-lu (HL) kiw-ess-ta (LHL).

継母.主格 その 子-対格 育てる-過去-終止

「継母がその子を育てた。」

b. hwuteymi (LLL)/*(HLL) ilum (LH)

継母.属格 名前

「継母の名前」

c. hwuteymi-lu (HLLL) ttayly-ess-ta (LHL).

継母-対格 殴る-過去-終止

「継母を殴った。」

d. hwuteymi-nu (HLLL) cwuk-ess-ta (LHL).

継母-話題 死ぬ-過去-終止

「継母は死んだ。」

(51) apai (LHL) お祖父さん

a. apai (LHL)/*(LLL) sselmay-lu (LHL) mantul-ess-ta (LHLL).

お祖父さん-主格 そり-対格 作る-過去-終止

「お祖父さんがそりを作った。」

b. apai (LLL)/*(LHL) wos (H)

お祖父さん-属格 服

「お祖父さんの服」

c. apai-lu (LHLL) ttayly-ess-ta (LHL).

お祖父さん-対格 殴る-過去-終止

「お爺さんを殴った。」

d. apai-nu (LHLL) salaiss-ta (LHLL).

お爺さん-話題 生きている-終止

「お爺さんは生きている。」

(52) kkakkwulay (LLH) ケチ

a. (ku) kkakkwulay (LLH)/*(LLL) pap-u (HL) sa-ss-ta (HL).

そのケチ-主格 ご飯-対格 買う-過去-終止

「(その) ケチがご飯をおごった。」

b. (ku) kkakkwulay (LLL)/*(LLH) twon (H)

そのケチ-属格 お金

「(その) ケチのお金」

c. (ku) kkakkwulay-lu (LLHL) ttayly-ess-ta (LHL).

そのケチ-対格 殴る-過去-終止

「(その) ケチを殴った。」

d. (ku) kkakkwulay-nu (LLHL) pwuca tay-ss-ta (HLLL).

そのケチ-話題 お金持ちになる-過去-終止

「(その) ケチはお金持ちになった。」

(53) kamwutan (LLL) 歌舞団

a. kamwutan-i (LLLH)/*(LLLL) wo-n-ta (HL).

歌舞団-主格 来る-将来-終止

「歌舞団が来る。」

b. kamwutan-i (LLLL)/*(LLLH) kwongyen (HL)

歌舞団-属格 公演

「歌舞団の公演」

c. kamwutan-u (LLLH) mantul-ess-ta (LLHL).

歌舞団-対格 作る-過去-終止

「歌舞団を作った。」

d. kamwutan-unu (LLLHL) sil-ta (HL).

歌舞団-話題 嫌い-終止

「歌舞団は嫌いだ。」

(50)の *hwuteymi* (HLL)「継母」は、主格が付く場合はピッチが(HLL)であり、属格が付く場合は(LLL）である。対格と話題マーカーが付く場合には、両者共に(HLLL)である。また、(51)の *apai* (LHL)「お祖父さん」は、主格と属格が付いた場合にピッチがそれぞれは(LHL), (LLL)である。また、対格と話題マーカーが付く場合は共に(LHLL)になる。続けて、(52)の *kkakkwulay* (LLH)「けち」は、主格と属格が付く場合にピッチがそれぞれ(LLH), (LLL)である。また、対格と話題マーカーが付く場合には、両者とも(LLHL)である。最後に、(53)の *kamwutan* (LLL)「歌舞団」は、主格と属格が付く場合には、それぞれ(LLLH), (LLLL)であり、対格と話題マーカーが付いた場合には、両者共に(LLLH)である。

以上、調べた人称代名詞及び名詞に(格)助詞が付く時のピッチアクセントを以下の表でまとめている。表 2 は人称代名詞に関する資料であり、表 3 は名詞に関する資料である。

表 2.　延辺朝鮮語の[人称代名詞-格助詞]のピッチアクセント

代名詞		-主格	-属格	-対格	-話題
1 人称	na	nay (H)	nay (L)	na-lu (HL)	na-nu (HL)
2 人称	ne	ni (H)	ni (L)	ne-lu (LH)	ne-nu (LH)
	cey	cey (H)	cey (L)	cey-lu (LH)	cey-nu (LH)
疑問代名詞	nwuki	nwuki (HL)	nwuki (HL)	nwuki-lu (HLL)	nwuki-nu (HLL)

表 3.　延辺朝鮮語の[名詞-格助詞]のピッチアクセント

名詞		語彙項目	-主格	-属格	-対格	-話題
1音節	H型	ssal 米, pa 縄, khwo 鼻	ssal-i (HL), pa-i (HL), khwo-i (HL)	ssal-i (LL), pa-i (LL), khwo-i (LL)	ssal-u (HL), pa-lu (HL), khwo-lu (HL)	ssal-unu (HL), pai-nu (HLL), khwoi-nu (HLL)
	L型	mal 馬	mal-i (LH)	mal-i (LL)	mal-u (LH)	mal-unu (LHL)
2音節	HL型	aytul 子供達	aytul-i (HLL)	aytul-i (LLL)	aytul-u (HLL)	aytul-unu (HLL)
	LH型	tayci 豚	tayci (LH)	tayci (LL)	tayci-lu (LHL)	tayci-nu (LHL)
	LL型	palam 風	palam-i (LLH)	palam-i (LLL)	palam-unu (LLH)	palam-unu (LLHL)
3音節	HLL型	hwuteymi 継母	hwuteymi (HLL)	hwuteymi (LLL)	hwuteymi-lu (HLLL)	hwuteymi-nu (HLLL)
	LHL型	apai お祖父さん	apai (LHL)	apai (LLL)	apai-lu (LHL)	apai-nu (LHLL)
	LLH型	kkakkwulay ケチ	kkakkwulay (LLH)	kkakkwulay (LLL)	kkakkwulay-lu (LLHL)	kkakkwulay-nu (LLHL)
	LLL型	kamwutan 歌舞団	kamwutan-i (LLLH)	kamwutan-i (LLLL)	kamwutan-u (LLLH)	kamwutan-unu (LLLHL)

まず、表 3 の結果から 1 音節・2 音節・3 音節の語彙は基本的に主格と属格は分節音 *-i* であり、格助詞そのものでは二つの文法格が容易に区別することができないが、随伴するピッチアクセントにより区別できることが分かる。基本的に、主格が付く環境では語彙のピッチアクセントは他の格助詞である対格または話題マーカーが付いた時と同じく元の語彙のピッチアクセントが保持されるが、属格が付く環境においては、ピッチアクセントに変化が生じ、元の語彙が(H)ピッチを含んでいる場合は、(H)が(L)に変化する。変化が生じないと考えられる L..L 型でも、二つの文法格は同様の区別が可能である。表 3 でも示されるように、1 音節、2 音節、3 音節のピッチアクセントが L 型、LL 型、LLL 型の語彙は、主格が付いた場合にそれぞれ LH, LLH, LLLH になり、最後に H がくることで、属格が付く LL, LLL, LLLL の場合と区別される。但し、表 2 が示すように、1 音節の 2 人称代名詞の *ni*「君」、*cey*「あなた」は、主格が生じる環境において、共に(H)ピッチであり、対格と話題マーカーが付いた時は(L)ピッチである。対格、話題マーカーが付く時は(L)であることから、元の 2 人称の語彙のピッチが(L)であると予想されるが、主格の環境では何らかの原因により、(H)ピッチに変わったことになる。尚、L..L 型の人称代名詞及び名詞は、主格と属格を比較する場合、語彙そのもののピッチアクセントだけでは区別できない。この場合は語彙と語彙に付く主格及び属格（の分節音である）*-i* を含む「一体物」のピッチアクセントによって二つの文法格を区別する必要がある。

本節の結論として、主節で主格と属格の二つの文法格は、語彙と助詞(分節音で) *-i* の一体物のピッチアクセントで区別されることを示した。基本的に、主格の場合、語彙と助詞の一体物のピッチアクセントは、必ず(H)が含まれる「H-型」である。属格の場合は、L が続く形の「L-型」である。このように主格と属格で標示される名詞句のピッチアクセントは常に対立している関係であるため、主格語句と属格語句はピッチアクセントによって、容易に区別される[15]。

[15] 疑問代名詞 *nwuki*「誰」(HL)は、主格と属格が付いた場合にピッチアクセントが共に(HL)であり、主格と属格を伴う時にピッチアクセントで変化が見られない。本論文の主な目的は主格と属格を伴う名詞句がピッチアクセントによって容易に区別されることを観察することであるので、疑問代名詞は例外になる。

4.3. 延辺朝鮮語の関係節における二種類のピッチアクセント

本節では、最初に延辺朝鮮語の関係節の主語の位置に置かれる名詞句が二種類のピッチアクセントで発音されることを観察し、その現象が関係節で主格語句と属格語句が両方可能であることから生じる現象であることを主張する。この主張における根拠は主に二つある。第一は、この二種類のピッチアクセントは、4.2 で観察している主格と属格を伴う名詞句のピッチアクセントにそれぞれ一致することである。第二は、4.2 節では既に主節で主語のピッチアクセントはそれに対応する一つしかないことを観察したが、本節では主語位置にある名詞句の二種類のピッチアクセントは延辺朝鮮語の関係節という統語環境で見られる現象である点である。以下に関係節におけるピッチアクセントの変化について詳細に検討しながら、上記の根拠に対する説明を加えることにする。まずは、1 音節の語彙項目(54)を用いた関係節の例(55-57)を考えよう。

(54) 1 音節

a. H 型: ssal 米、khwo 鼻

b. L 型: mar 馬

(55) ssal (H) 米

a. [[ssal-i (HL) iss-nun (LL)] cip (L)]

米-主格 ある-連体形.現在 家

「米がある家」

b. [[ssal-i (LL) iss-nun (LL)] cip (L)]

米-属格 ある-連体形.現在 家

「米のある家」

(56) khwo (H) 鼻

a. [[khwo-i (HL) khu-n (L)] salam (HL)]

鼻-主格 大きい-連体形.現在 人

「鼻が大きい人」

b. [[khwo-i (LL) khu-n (L)] salam (HL)]

鼻-属格 大きい-連体形.現在 人

「鼻の大きい人」

(57) mal (L) 馬

a. [[mal-i (LH) iss-nun (LL)] cip (L)]

馬-主格 ある-連体形.現在 家

「馬がある家」

b. [[mal-i (LL) iss-nun (LL)] cip (L)]

馬-属格 ある-連体形.現在 家

「馬のある家」

(55)で *ssal* (H)「米」が *ssal-i* (HL)と *ssal-i* (LL)と、両方のピッチアクセントに発音され、また(56)でも同様に *khwo* (H)「鼻」が *khwo-i* (HL)と *khwo-i* (LL)に発音される。(57)でも同じことが観察され、*mal* (L)「馬」が *mal-i* (LH)と *mal-i* (LL)に発音される。(55-57)の関係節の述語連体形のピッチアクセントは、*iss-nun* (LL)「ある」、*khu-n* (L)「大きい」、*iss-nun* (LL)「いる」であり、関係節の主要名詞のピッチアクセントは、*cip* (L)「家」、*salam* (HL)「人」である。

最初に、上記で述べている述語のピッチアクセントの変動、主要名詞は元の語彙のピッチアクセントを保持について、池 (2012)の述語連体形におけるアクセントに関する観察に基づいて解説する。池 (2012)では以下で示すように「述語連体形におけるアクセント規則」が提案される。

(58) 述語連体形におけるアクセント規則（池 2012）

[用言-連体形語尾]のアクセントは、本来の用言の語幹の(H)がある場合に(L)に変わり、L が続く形式で現れる。また、後に来る体言のアクセントだけそのまま保持される。

(55-57)で観察する連体形述語のアクセントの変動及び主要名詞のアクセントの保持は、(58)の規則から説明される。つまり、動詞の語幹 *iss-*(L)「ある/いる」、*khu-*(HL)「大きい」の中で、*khu-*は本来の(H)から(L)に変わるのに対し、関係節の主要名詞 *cip* (L)「家」、*salam* (HL)「人」は、元の語彙のピッチアクセントが保たれている。

次に、本研究で最も注目している主語位置にある名詞句の二種類のピッチアクセントについて説明を加える。表 3 でも確認できるように、(55)の *ssal-i*(HL)と *ssal-i*(LL)、(56)の *khwo-i*(HL)と *khwo-i*(LL)、また、(57)の *mal-i*(LH)と *mal-i*(LL)の二種類のピッチアクセントは、主格（H-型）と属格（L-型）を伴う名詞句のピッチアクセントに合致する。つまり、関係節で主語位置に現れる名詞句は主格・属格のどちらでも標示されることが可能であることを示している。

次に、以下で 2 音節、3 音節の名詞及び人称代名詞においても、1 音節と同じ現象が見られることを示す。最初に 2 音節の例を見てみる。以下(59)は、2 音節の語彙項目であり、これらの語彙項目が現れる関係節の例を(60-62)で示している。

(59)　2 音節

a.　HL 型: aytul 子供たち

b.　LH 型: tayci 豚

c.　LL 型: palam 風

(60) aytul (HL) 子供達

a. [[ay-tul-i (HLL) ip-un (LL)] wos (H)]

子供−複数−主格 着る−連体形. 過去 服

「子供達が着た服」

b. [[ay-tul-i (LLL) ip-un (LL)] wos (H)]

子供−複数−属格 着る−連体形. 過去 服

「子供達の着た服」

(61) tayci (LH) 豚

a. [[tayci (LH) mek-un (LL)] paychay (HL)]

豚.主格 食べる-連体形.過去 白菜

「豚が食べた白菜」

b. [[tayci (LL) mek-un (LL)] paychay (HL)]

豚.属格 食べる-連体形.過去 白菜

「豚の食べた白菜」

(62) palam (LL) 風

a. [[palam-i (LLH) pwu-nun (LL)] nal (H)]

風-主格 吹く-連体形.現在 日

「風が吹く日」

b. [[palam-i (LLL) pwu-nun (LL)] nal (H)]

風-属格 吹く-連体形.現在 日

「風の吹く日」

(60-62)において、それぞれ *aytul-i* (HLL)と *aytul-i* (LLL)、*tayci* (LH)と *tayci* (LL)、*palam-i* (LLH)と *palam-i* (LLL)のように、二種類のピッチアクセントで発音され、それぞれは主格と属格におけるピッチアクセントに合致する。述語は *ip-un* (LL)「着た」、*mek-un* (LL)「食べた」、*pwu-nun* (LL)「吹く」であり、L-型のピッチである。動詞の語幹 *pwu-*「吹く」は(H)から(L)に変わっている。主要名詞は *wos* (H)「服」、*paychay* (HL)「白菜」、*nal* (H)「日」であり、ピッチアクセントに変化は見られない。

次に、3 音節の例を提示する。以下の(63)は 3 音節の語彙項目であり、(64-67)がそれらを用いた関係節の例である。

(63) 3 音節

a. HLL 型: hwuteymi 継母

b. LHL 型: apai お祖父さん

c. LLH 型: kkakkwulay けち

d. LLL 型: kamwutan (-i) 歌舞団

(64) hwuteymi (HLL) 継母

a. [[hwuteymi (HLL) kiwu-n (LL)] casik (HL)]

継母-主格 育てる-連体形.過去 子供

「継母が育てた子供」

b. [[hwuteymi (LLL) kiwu-n (LL)] casik (HL)]

継母-属格 育てる-連体形.過去 子供

「継母の育てた子供」

(65) apai(LHL) お祖父さん

a. [[apai (LHL) mantu-n (LL)] sselmay (LH)]

お祖父さん-主格 作る-連体形.過去 そり

「お祖父さんが作ったそり」

b. [[apai (LLL) mantu-n (LL)] sselmay (LH)]

お祖父さん-属格 作る-連体形.過去 そり

「お祖父さんの作ったそり」

(66) kkakkwulay (LLH) けち

a. [[(ku) kkakkwulay (LLH) sa-n (L)] pap (H)]

そのケチ-主格 買う-連体形.過去 ご飯

「そのケチが買ったご飯」

b. [[(ku) kkakkwulay (LLL) sa-n (L)] pap (H)]

そのケチ-属格 買う-連体形.過去 ご飯

「そのケチの買ったご飯」

(67) kamwutan (LLL) 歌舞団

a. [[kamwutan-i (LLLH) wo-nun (LL)] nal (H)]

歌舞団-主格 来る-連体形.現在 日

「歌舞団が来る日」

b. [[kamwutan-i (LLLL) wo-nun (LL)] nal (H)]

歌舞団-属格 来る-連体形.現在 日

「歌舞団の来る日」

(64-67)の 3 音節においても、やはり主語はそれぞれ *hwuteymi* (HLL)と *hwuteymi* (LLL)、*apai* (LHL)と *apai* (LLL)、*kkakkwulay* (LLH)と *kkakkwulay* (LLL)、*kamwutan-i* (LLLH)と *kamwutan-i* (LLLL)のように、二種類のピッチアクセントで発音され、それぞれは主格と属格におけるピッチアクセントに一致する。また、述語はそれぞれ、*kiwu-n* (LL)「育てた」、*mant-un* (LL)「作った」、*sa-n* (L)「暮らした」、*wo-nun* (LL)「来る」であり、L-型ピッチである。この中で、動詞の語幹 *kiwu-*「育てる」*mant-*「作る」のピッチは(LH)であり、(LL)に変化したことになる。さらに関係節の主要名詞 *casik* (HL)「子供」、*sselmay* (LH)「そり」、*pap* (H)「ご飯」、*nal* (H)「日」は、元の語彙のピッチアクセントのままであり、変化は見られない。以上のように 3 音節でも動詞のピッチアクセントの変化及び主要名詞のアクセントの保持は連体形のアクセント規則で説明される。

最後に、人称代名詞も関係節において、二種類のピッチアクセントによって発音されることを以下(68-70)にて、示す。

(68) nay (H) 私

a. [[nay (H) ssu-n (L)] swosel (HL)]

私.主格 書く-連体形.過去 小説

「私が書いた小説」

b. [[nay (L) ssu-n (L)] swosel (HL)]

私.属格 書く-連体形.過去 小説

「私の書いた小説」

(69)　ni (L) 君

a.　[[ni (H)　　sal-ten (LL)]　　maul (LL)]

君.主格　暮らす-連体形.回顧　村

「君が暮らしていた村」

b.　[[ni (L)　　sal-ten (LL)]　　maul (LL)]

君.属格　暮らす-連体形.回顧　村

「君の暮らしていた村」

(70)　cey (L) あなた

a.　cey (H)　　tamkwu-n (L)　　kimchi (LH)

あなた.主格　作る-連帯形.過去　キムチ

「あなたが作ったキムチ」

b.　cey (L)　　tamkwu-un (L)　　kimchi (LH)

あなた.属格　作る-連帯形.過去　キムチ

「あなたの作ったキムチ」

上記の例で１人称の *nay* (H)は、*nay* (L)にも発音される。同じく、*ni* (H)は *ni* (L)に、*cey* (H)は *cey* (L)にも発音される。動詞の *ssu-* (H)「書く」、*sal-* (H)「暮らす」、*tangkwu-* (LH)「作る」はすべて *ssu-n* (L)「書いた」、*sal-ten* (LL)「暮らしていた」、*tangkwu-n* (LL)「作った」になり、L-型ピッチに変化する。また、主要名詞 *swosel* (HL)「小説」、*maul* (LL)「村」、*kimchi* (LH)「キムチ」は元のピッチアクセントが保持される。なお、述語のピッチアクセントの変化及び主要名詞のアクセントの保持は連体形アクセント規則で説明され、人称代名詞の二種類のピッチアクセントは、主格と属格におけるピッチアクセントにそれぞれ一致する。

ここで、特定の人と指すことができる疑問代名詞 *nwuki* (HL)について少し取り上げる。以下の

関係節で示しているように、*nwuki*(HL)は他の名詞と異なり、単一のピッチアクセントでしか発音されない。それは、前の節でも観察しているように、疑問代名詞はそもそも主格と属格が付く場合に共にピッチアクセントが(HL)であるからだと考えられる。

(71) a. [[yenkil-ey (LHL) nwuki (HL) sanwo-n (LL)] cip]]-unu (LHL) cwo-te-la (HLL).

延吉-所格 あの人-主格 買っておく-過去 家-話題 いい-回顧-接尾詞

「延吉にあの人が買っておいた家はよかったよ.」

b.* [[(yenkil-ey (LLL)) nwuki (LL) sanwo-n (LL)] cip]-unu (LHL) cwo-te-la (HLL).

ここまでの内容をまとめると、延辺朝鮮語の 1 音節、2 音節、3 音節の名詞及び人称代名詞は関係節において、疑問代名詞を除くと、二種類の H-型と L-型で発音され、それぞれのピッチアクセントは、前の章で観察している主格と属格を伴う時の名詞句のピッチアクセントに一致する。また、述語連体形における述語のアクセントの消去(L-型になること)及び主要名詞のアクセントの保持は、池 (2012)で観察されるように、連体形という環境で述語のアクセントに変動が生じたことになる。このような述語連体形における述語のアクセント消去及び主要名詞のアクセント保持は、池 (2012)で指摘されるように、名詞複合語と最後の名詞の前にくる要素のアクセントがすべて消去されるという点において類似点がある。

しかしながら、本論文で主語位置にいる名詞句の L-型の方が、単に連体形という環境におけるアクセントの消去として説明を済ましていないのは、このようなアクセントの消去は、主節ではなく関係節という統語環境で生じる現象であるからである。ここで、連体形による関係節と名詞複合語では完全に同じアクセント規則が働くとは限らないことについて説明を行う。以下の(72-73)の対比からその事実が明らかに示される。名詞複合語の(72)では、一番右のアクセントのみが保持され、元のピッチアクセントに(H)を含んでいるそれぞれの語彙は、複合名詞句の要素になった場合にすべての名詞の(H)が(L)に変わる。一方、述語連体形を伴う関係節(73)では、(73b)のようにアクセントが消去された方は非文である。

(72) [cwu (H~L)＋cengpwu (HL)＋pankwongsil (LLH)＋swocang (HL)＋pise (HL)]

州　政府　事務室　所長　秘書

‘Cwucengpwu pankwongsil swocang pise’ (LLLLLLLLHL) (朴 2000)

(73) a. [[aytuli (HLL)　kachi (HL)　yelsimhi (HLL)　tallye wolu-n(LH.LL)]　kyetan (LL)]

子供達-主格　みんなで　勢いよく　駆け上る-連体形.過去　階段

「子供達がみんなで勢いよく駆け上った階段」

b. * [[aytuli (LLL)　kach (LL)　yelsimhi (LLL)　tallye wo-lun (LL.LL)]　kyetan (LL)]

例(73)は日本語のガ・ノ交替に関する Harada (1971)で観察している例を延辺朝鮮語に置き換えたものである。(73b)は日本語でも非文であるが、Harada (1971)は日本語の属格で標示される名詞句は述語との間に複数の要素が入ると非文になることを指摘している。この観察に基づいて、Miyagawa (2011)では主格主語を含む節と属格主語を含む節の大きさの違いによって理論的な説明を加えている。その詳細な説明については Miyagawa (2011)を参照されたいが、とりわけ、ここで注目しているのは、(73b)がアクセント規則からは非文であることが説明できないことである。(73b)は(72)の名詞複合語とは統語派生が異なる関係節という名詞句におきる統語現象である。尚、4.4 節、5.3 節などで、延辺朝鮮語で属格主語が存在することについて理論的な根拠を提示するが、上記の(73b)などの現象を含む L-型ピッチの主語位置にいる名詞句は、日本語と同じく延辺朝鮮語の関係節の属格主語現象として捉えられるべきであることを提案する。

以上の観察から、延辺朝鮮語の関係節の主語位置の名詞句における二種類のピッチアクセントは、その関係節の主語位置に置かれる名詞句において両方の主格及び属格が標示されうる結果、生じた現象であると考えられる[16]。

[16] 述語連体形におけるピッチアクセント規則から(71b)で非文である現象も説明できない。なぜなら、当規則からは主名詞より左側にいる要素はアクセントが削除されることを予測するが、(71b)で示しているように、*nwuki* のピッチは(LL)では実現できないからである。

4.4. 延辺朝鮮語の主格・属格交替

直前の節において、延辺朝鮮語の関係節で主語位置に現れる名詞句が主格と属格に標示されることができ、主格・属格交替が存在する可能性を提示した。最初に、延辺朝鮮語の属格語句(L-型ピッチ)は、現代朝鮮語とは違い、「交替した」属格であることから、延辺朝鮮語に主格・属格交替が存在することを証明する。その証拠一として、以下の例において延辺朝鮮語の属格構文は副詞を文頭においても許されることを提示する。

(74) a. [[caknyen-ey (LLH) aytul-i (HLL) mek-un (LL)] paychay]-nu (HLL)

去年 子供達-主格 食べる-連体形.過去 白菜-話題

i key-ta (HLL).

これ-終止

「去年子供達が食べた白菜がこれだ。」

b. [[caknyen-ey (LLH) aytul-i (LLL) mek-un (LL)] paychay]-nu (HLL)

去年 子供達-属格 食べる-連体形.過去 白菜-話題

i key-ta (HLL).

これ-終止

「去年子供達の食べた白菜がこれだ。」

(75) a. [wonul (LH) nay (H) pwo-n (L)] swosel]-unu (HLLL) i key-ta (HLL).

今日 私.主格 見る-連体形.過去 小説-話題 これ-終止

「今日私が読んだ小説はこの小説だ。」

b. [wonul (LH) nay (L) pwo-n] swosel]-unu (HLLL) i key-ta (HLL).

今日 私.属格 見る-連体形.過去 小説-話題 これ-終止

「今日私の読んだ小説はこの小説だ。」

上記の例において、IP 副詞 *caknyen-ey* (LLH)「去年」、*wonul* (LH)「今日」が文頭に置かれても、*aytul*「子供達」、*nay*「私」は H-型と L-型のピッチで発音され、主格と属格の交替が許される。IP 副詞が文頭に置かれた場合は、属格語句の *aytul* (LL)「子供達」, *nay* (L)「私」も IP 領域にいるので、Spec, DP に基礎生成していないことを示している。

次の証拠として、延辺朝鮮語の属格主語は関係節の中で主要名詞の所有者でなくても許されることを提示する。以下の(76)で *Yengchel* は主要名詞 *wos*「服」の所有者にならないが、属格で標示する(L-型ピッチ)ことが許される。ここで、「服」の所有者は「山田先生」であり、主語に伴われる属格は所有格でないことは明らかである。

(76) [[Yengcheli (LLL) ip-un (LL)] Yamata (LLL) sensayngnimi (LLLL) wos (H)]

Yengchel.属格 着る-連体形.過去 山田-属格 先生-属格 服

「Yengcheli の着た山田先生の服」

以上の事実から、延辺朝鮮語の属格語句は現代朝鮮語とは違い、副詞が前置される場合も、さらに主要名詞の所有者でない場合も属格で標示されることが許されるので、主語に所有者ではない属格が伴うことは明らかであり、延辺朝鮮語には主格・属格交替が存在することを裏付けている。

さらに、上記で観察したように中期朝鮮語の主格・属格交替は、関係節以外に *-om* 節や形式名

詞*-to*, *-kes* 節などで許されるが、同様に延辺朝鮮語でこれらの節で許されるかどうか観察する。*-om* 節は、延辺朝鮮語において文語のように聞こえ、口語では使われないが、形式名詞*-to*, *-kes* 節においては、延辺朝鮮語でも主格・属格交替が許される。中期朝鮮語の形式名詞*-to* は延辺朝鮮語で*-cwu* に該当し、*-kes* は延辺朝鮮語でも*-kes*（或いは*-ke*）である。以下には主格・属格交替がこれらの節で許される例を示す。

(77) a. Swunhi-nu (HLL) [[wonul (LH) aytul-i (HLL) ka-l (L)]
スンヒ-話題 今日 子供達-主格 行く-連体形.将来
cwu/ke]-lu (HL) al-ass-ta (LHL).
形式名詞-対格 知る-過去-終止
「スンヒは今日子供達が行くことを知る。」

b. Swunhi-nu (HLL) [[wonul (LH) aytul-i (LLL) ka-l (L)]
スンヒ-話題 今日 子供達-属格 行く-連体形.将来
cwu/ke]-lu (HL) al-ass-ta (LHL).
形式名詞-対格 知る-過去-終止
「スンヒは今日子供達の行くことを知る。」

文頭に副詞が置いてあり、従属節の環境である(77)において、*aytul-i* は H-型と L-型のピッチアクセント両方が可能なので、主格・属格交替が許されることが分かる。

日本語では、ト節において主格・属格交替が許されないが、延辺朝鮮語でも同様に補文標識*-ku* 節では許されない。以下の例で主格主語だけ許される。

(78) a. Swunhi-nu (HLL) [wonul (LH) aytul-i (HLL) ka-n-ta (HL)] ku (L)

スンヒ-話題 今日 子供達-主格 行く-将来-終止 補文標識

malhay-ss-ta (LLL).

話す-過去-終止

「スンヒは今日子供達が行くと話した。」

b. * Swunhi-nu (HLL) [wonul (LH) aytul-i (LLL) ka-n-ta (HL)] ku (L)

スンヒ-話題 今日 子供達-属格 行く-将来-終止 補文標識

malhay-ss-ta (LLL).

話す-過去-終止

「スンヒは今日子供達が行くと話した。」

(78)の *-ko* 埋め込み節において、属格主語は許されない。延辺朝鮮語の主節のピッチアクセントを前章で述べたが、主節で主語は属格を示す L-型ピッチにはならないことから、延辺朝鮮語の主格・属格交替は動詞が連体形語尾になる関係節でしか許されないことが予測される。 *-ku* 節の述語は終止形であるため、主格・属格交替が許されないと推測できる。2 章で日本語の主格・属格交替は埋め込み節の動詞の活用が終止形と考えられるト節で許されないことを紹介した。現代日本語では、動詞は終止形と連体形の区別がつかないが、延辺朝鮮語は（現代朝鮮語と同様）、連体形と終止形が述語の語尾変化で区別できる。以上の延辺朝鮮語の主格・属格交替が許される構文をまとめると、中期朝鮮語のように *-om* 節で許されないが、関係節、形式名詞の *-cwu/-kes* 節などの述語連体形の埋め込み節で許される。

4.5. まとめ

本章では、延辺朝鮮語の関係節で主語に相当する名詞語句が H-型と L-型に発音されることを示し、それぞれ主格と属格に伴うピッチアクセントに一致することから、主格・属格交替による現象であると主張した。延辺朝鮮語の属格構文において、副詞を用いたテスト及び所有格ではないことを示すために所有者解釈のテストを用いて、現代朝鮮語と異なり、この種の文に現れる属格が「交替した」属格であることを示した。また、この章では、延辺朝鮮語と他言語における主格・属格交替の統語環境を比較し、述語連体形の関係節では許されるが、*-om* 節や補文標識 *ku* 節では許されないことを指摘した。

これまでの章で日本語の主格・属格交替現象を現代朝鮮語・中期朝鮮語・延辺朝鮮語において議論したが、語言語で主格・属格交替の有無とそれが許される従属節を以下にまとめる。

表 4.　諸言語の主格・属格交替の有無及び許される統語環境

	日本語	現代朝鮮語	中期朝鮮語	延辺朝鮮語
主格・属格交替	有	無	有	有
従属節	関係節 （ノ節） （コト節）		*-om* 節 関係節 （*-to* 節） （*-kes* 節）	関係節 （*-cwu* 節） （*-kes* 節）

第 5 章　中期朝鮮語及び延辺朝鮮語の他動性制約の現状

本章では、中期朝鮮語と延辺朝鮮語の主格・属格交替現象における他動性制約の性質の有無について調査する。5.1 では、日本語の他動性制約及びその本質について Harada (1971), Watanabe (1996), Hiraiwa (2005)などに基づき、説明する。5.2 では、中期朝鮮語の *-om* 節で属格主語と対格を伴う直接目的語が一緒に現れることができ、他動性制約がないことを観察する。一方、中期朝鮮語の関係節では属格主語と対格を伴う直接目的語が現れず、pro が存在すると考えられることから、他動性制約があると予測することを指摘する。5.3 では、延辺朝鮮語で対格を伴う直接目的語が関係節に現れる場合は、主格・属格交替が許されないことを検証し、他動性制約の影響が及ぼしていることを見る。5.4 では、中期朝鮮語と延辺朝鮮語では、主格・属格交替が許される関係節などにおいて、裸の目的語(bare object)が存在しても属格主語が許されることを観察する。しかしながら、延辺朝鮮語の裸の目的語はある条件が満たされば、名詞抱合(noun incorporation)し、対格を必要としないため、他動性制約において対格を伴う直接目的語と同じように分析すべきではないと結論付ける。最後に、5.5 でこの章をまとめる。

5.1.　他動性制約及びその本質

日本語の主格・属格交替は、対格を伴う直接目的語が関係節などに存在する場合には許されないが、このような性質を他動性制約と敬称する。例えば、(79)の関係節で目的語「本」が関係節化され、目的語の痕跡が残される場合は、交替が許される。一方、(80)のように「本を」が目的語の場所に残される場合には、交替が許されない。また、(81)のように対格を伴わない目的語「日本へ」が存在する場合でも、交替が許される。(Harada 1971, Watanabe 1996)

(79) a. [[ジョンが　e_i 買った] 本 $_i$]

b. [[ジョンの　e_i 買った] 本 $_i$]

(80) a. [[ジョンが　e_i　本を　買った] 店 $_i$]

b. * [[ジョンの　e_i　本を　買った] 店 $_i$]

(81) a. [[e_i　ジョンが　日本へ 行った] 日 $_i$]

b. [[e_i　ジョンの　日本へ 行った] 日 $_i$]

上記の例の中では、対格を伴う直接目的語が存在する(80)だけ、属格主語が不可能になる[17]。一方、(79b)では、目的語の位置に痕跡が残され、対格を必要としないので、他動性制約が誘発されない。また、(81b)でも非対格要素である「日本へ」は、対格を必要としないため、同様に他動性制約が誘発されない。なお、Hiraiwa (2005)などが日本語の主格・属格の交替現象で見られる他動性制約の本質について、表面上の語順に関係なく、属格主語が属格を認可する時に目的語が対格標示することができないことにあると指摘している。この事実は以下(82-83)の対比からも示されている。

(82) a. [[太郎が　LSLT を　買った] 店]

b. * [[太郎の　LSLT を　買った] 店]

c. * [[LSLT を　太郎の　買った] 店]

[17] Harada (1971), Watanabe (1996)では、方言や話者の年齢によって、他動性制約の効果が現れない場面があり、特に、日本の若い人口のほうが、高齢者人口よりも直接目的語の発生に対して容認されにくい傾向があることを指摘している。

(83) a. [[太郎が　e_i　本を　貸した]　人 $_i$]

b. * [[太郎の　e_i　本を　貸した]　人 $_i$]

c. [[太郎の　e_i　*pro*　貸した]　人 $_i$]

(82)で示していることは、対格を伴う直接目的語がかき混ぜ規則によって文頭に置かれても、属格主語は許されないということである。ここで着目すべきことは、(82c)で直接目的語が属格主語の前に移動しても、対格を伴う直接目的語「LSLT」は対格を得なければならないことである。一方、(83)で示したのは、属格主語が対格を伴う直接目的語が存在すると許されないが、目的語が pro である場合は許される。これは、(83c)で pro が形態格を必要としないため、「太郎の」が属格標示に影響をされないからである。

5.2.　中期朝鮮語の他動性制約における二面性

中期朝鮮語は他動性制約に関して二面性を有する。*-om* 節の属格構文では対格を伴う目的語が存在し、他動性制約を有しない例を観察するが、関係節では対格を伴う目的語が属格主語と共起する例が発見されず、一方、pro が存在することから他動性制約の影響が及んでいると推測できる[18]。

まず、中期朝鮮語の *-om* 節で属格主語と対格を伴う直接目的語が共起する例を提示する。以下の(84-85)は『杜詩諺解』から発見した例である。

---

[18] 中期朝鮮語の他動性制約について初めて注目したのは Jang (1995)であるが、他動性制約の違反として、属格主語文 i)の裸の目的語 *swulwuy* 「カート」が *-om* 節に現れる例を提示している。しかしながら、本研究では 5.4 節で議論しているように、中期朝鮮語の裸の目的語は他動性制約があることを証明できないとする立場である。

i)　nwuy　[TANGNANG-oy　NUNGhi　swulwuy-∅　kesul-wom]-ul　pwoliwo[18]
誰-主格　螗蜋-属格　充分に　カート　押す-名詞化-対格　見る
（日本語訳）「誰が螗蜋がカートを押すことを見るのか。」(南明集 2: 73b)

(84) [CENGHAKWONG-oy culumskilh_ulwo WOKCHAYK-ol CENh-wom]-ol

清河公-属格 近道で 玉冊-対格 伝える-名詞化-対格

masto-la.

逢う. 過去

（日本語訳)「清河公が近道で玉冊を伝えるのを逢う.」 (杜詩 24:13b)

(85) i kulim_ul DAYhoyasye mozom-i huwok-honi

この 画-対格 対して 心-主格 魅了される-から

[kutuy-uy put-kua kip-kua-lol CWUNGhi neky-wom-ol]

あなた-属格 筆-と 布-と-対格 大切に 思う-名詞化-対格

al-wala.

知る-回顧-WO(1 人称)-終止

（日本語訳)「この画に対して心が魅了されることからあなたが筆と布を大切に思うことを知る.」 (杜詩 16:29b)

(84)の *-om* 節では、属格主語 *CENGHAKWONG* が現れ、動詞 *CENh-*「伝える」の目的語とみられる *WOKCHAYK*「玉冊」が共起している。（さらに、(84)の属格構文では PP *culumskilh-ulwo*「近道で」も現れることが分かる。）また、(85)の埋め込み節にも、属格主語 *kutuy*「あなた」と動詞 *nek-*「思う」の目的語 *put-kua kip-kua*「筆とシルク」が同時に現れる。要するに、この二つの *-om* 節では、属格主語と対格を伴う直接目的語が共起しており、他動性制約が日本語とは違い、見られないと考えられる。

次に、中期朝鮮語の関係節を見る。本研究では、関係節では、*-om* 節のように属格主語と対格を伴う直接目的語が共に現れる例が観察されなかった上に、空代名詞の pro が共起する例があることが確認された。以上から、表面的に対格を伴う直接目的語が現れることができずに、代わり

に対格(形態格)を必要としない pro が生じているので、他動性制約があると推測できる。最初に、関係節において、対格がついた目的語の例を一つだけ見つけられたので、以下に提示する。この例(86)では、属格語句は Spec, DP に基礎生成している可能性があると見られる。

(86) ney [[nay-oy yere KEP-ey iturey-s eykutu-n <u>CWUNGSAYNG-ol</u>
君.主格 私-属格 長い間に このような 頑固な 衆生-対格
SUKOloWi TWOTHALho-n-wo-n] il]-ol pwononi…
ご大儀に 逃脱する-現在-WO-連体形.過去 形式名詞-対格 見る…
「君が私の長い間にこのような頑固に生き物をご大儀に逃脱することを見る…」
(釋詳 11:7-8) (Kang 2000)

(86)では、従属節に現れる *nay*「私」は属格で標示され、対格を伴う直接目的語 *CWUNGSAYNG*「生き物」が現れる。また、述語と属格語句の間には時間副詞 *yere kep-ey*「長い間」があることから、*nay* は少なくとも TP の領域、もしくはそれより高い位置 Spec, DP にいることが予想される。しかしながら、この文は *nay il*「私のこと」の解釈が可能であり、所有格の例として見なせると考えられる。

さらに、以下の二つの関係節(87a,b)では、目的語が生じても自然である文だが、対格を伴う直接目的語が現れていない。

(87) a. [[LWOKMWOPWUIN-oy nah]-un kwoc]-i-n ka.

鹿母夫人-属格 産む-連体形.過去 場所-接尾詞-疑問

「鹿母夫人の産んだ場所なのか？」 (釋詳 11:33a)

b. [[LWOKMWOPWUIN-oy nahosi-n]-to]-l

鹿母夫人-属格 産む-尊敬-連体形.過去-形式名詞-対格

alo-s-ikwo...

知る-尊敬-接続詞

「鹿母夫人の産んだことを知り...」 (釋詳 11:33a)

(87a)の関係節は、おそらく「鹿母夫人が赤ちゃんを産んだ場所」を意味するが、節の中に目的語「赤ちゃん」が現れていない。また、(87b)の関係節は、「鹿母夫人が赤ちゃんを産んだこと」を意味するが、目的語の「赤ちゃん」が同様に節の中に現れていない。

以上の(86), (87a,b)に対する解釈が正しければ、中期朝鮮語の関係節では属格主語と対格を伴う直接目的語が共起できない可能性が強いことから、他動性制約を有すると予測される。

5.3. 延辺朝鮮語の他動性制約

延辺朝鮮語の主格・属格交替において他動性制約を有するかどうかを検証する前に、関係節の目的語のピッチアクセントに関する研究を概観する。池 (2012)では目的語が対格を伴わない例(88)で連体形ピッチアクセント規則が適応されることを指摘している。*pap*「ご飯」、*cuk*「お粥」、*ssal*「お米」は本来(H)ピッチであるが、(88)のように「述語の連体形＋名詞」の環境においては、(L)ピッチになっている。本研究では、加えて、(89)のように関係節で対格「*-u*」を伴う目的語のピッチアクセントが低くなることだけでなく、元のピッチアクセントを保持できることも指摘する。

(88) 池（2012）

a. pap (L)-∅ mek-nun (LL) salam (HL)

米 食べる-連体形.現在 人

「米を食べる人」

b. cwuk (L)-∅ mantu-l (LL) sikan (LH)

お粥 食べる-連体形.将来 時間

「お粥を食べる時間」

c. ssal (L)-∅ hwumchi-n (LL) twotwoki (LLH)

米 盗む-連体形.過去 泥棒

「米を盗んだ泥棒」

(89) a. pap-u (HL/LL) mek-nun (LL) salam (HL)

米-対格 食べる-連体形.現在 人

「米を食べる人」

b. cwuk-u (HL/LL) mantu-l (LL) sikan (LH)

お粥-対格 作る-連体形.将来 時間

「お粥を作る時間」

c. ssal-u (HL/LL) humchi-n (LL) twotwoki (LLH)

米-対格 盗む-連体形.過去 泥棒

「米を盗んだ泥棒」

上記の例で対格を伴う直接目的語のピッチアクセントは低くなることも、元のピッチアクセントを保持することも両方可能である。なお、対格を伴う直接目的語は、述語連体形アクセント規則が適応され場合があり、自由に適用されるあることが伺える。

それでは、延辺朝鮮語に他動性制約があるかどうかを検証する。以下の関係節(90-92)において、属格主語(L-型ピッチ)は対格を伴う直接目的語が現れた場合に、文は非文になる。

(90) a. [[ay-tul-i (HLL) pap-u (HL/LL) mek-ul (LL)] sikan (LH)]
子供-複数-主格 ご飯-対格 食べる-連体形.将来 時間
「子供達がご飯を食べる時間」

b. [[ay-tul-i (LLL) pap-u (*HL/*LL) mek-ul (LL)] sikan (LH)]
子供-複数-属格 ご飯-対格 食べる-連体形.将来 時間
（日本語訳）「子供達がご飯を食べる時間」

(91) a. [[emeni (LLH) cwuk-u (HL/LL) mantu-l (LL)] sikan (LH)]
お母さん-主格 お粥-対格 作る-連体形.将来 時間
「お母さんがお粥を作った時間」

b. [[emeni (LLL) cwuk-u (*HL/*LL) mantu-l (LL)] sikan (LH)]
お母さん-属格 お粥-対格 作る-連体形.将来 時間
（日本語訳）「お母さんがお粥を作った時間」

(92) a. [[Chelswu (HL) chayk-u (HL/LL) sa-n(L)] secem (HL)]
Chelswu-主格 本-対格 買う-連体形.過去 本屋
「Chelswu が本を買った本屋」

b. [[Chelswu (LL) chayk-u (*HL/*LL) sa-n (L)] secem (HL)]
Chelswu-属格 本-対格 買う-連体形.過去 本屋
（日本語訳）「Chelswu が本を買った本屋」

上記の例で主格主語を含む a の例は、目的語が二つのピッチアクセント H-型、L-型で発音することが可能であるが、属格主語はその二つピッチアクセント型の目的語とも不可能である[19]。また、以下の(93)では項でない語句「日本へ」が L-型ピッチの時は属格主語と一緒に現れることが観察される。

(93) a. [[Chelswu (HL) <u>ilpwon-ey (HLL/LLL)</u> ka-n (L)] nal (H)]

Chelswu-主格 日本-へ 行く-連体形.過去 日

「Chelswu が日本へ行った日」

b. [[Chelswu (LL) <u>ilpwon-ey (*HLL/LLL)</u> ka-n (L)] nal (H)]

Chelswu-属格 日本-へ 行く-連体形.過去 日

「Chelswu の日本へ行った日」

以上の(90-92)において、属格主語と L-型ピッチの対格を伴う直接目的語と一緒に同じ節に現れることができないが、L-型の対格を伴わない目的語とは一緒に現れることができる。以上から、延辺朝鮮語の主格・属格交替には、日本語と同じく他動性制約があると考えられる。

ここで、(90-93)において、属格語句が、H-型の目的語が後ろに置かれた時に非文になることについて、簡単な考察を行う。池 (2012)では、連体形述語は常に L-型になり、主要名詞は元のアクセントが保持されることを指摘している。また、既に(90)で目的語が二つのピッチアクセントが可能なことが検証された。つまり、関係節で主語、目的語などには必ずしもそのアクセント規則が適応されるとは限らないことになる。しかしながら、このアクセント規則は、関係節などの名詞句で最後に位置する(主要)名詞以外に、主語及び目的語などの助詞を伴う名詞句が L-型ピッチである場合には、続いて H-型が入ることができないことで、その影響を及ぼしている。つまり、延辺朝鮮語の属格語句は L-型であるため、後ろに H-型のものは許されないことになる。それは、

19 例の(88-90)で属格主語を含む例で、(LL)ピッチの目的語が現れた場合、(HL)のピッチの目的語よりは、文法性判断で悪く感じないが、(LL)ピッチの目的語に限定詞 *i*「この」を付け加えると、容認度が極端に落ちる。延辺朝鮮語で目的語の限定詞に他動性制約が関係する可能性については、今後の調査がさらに必要とされる。

以下の例(94)での対比からも明らかである。以下の(94a-b)で、副詞 *caknyeney* (LLH)「昨年」は規則の影響を受け、属格主語と述語の間に置くと(LLL)でしか発音できないが、規則の影響を受けない(94c)では副詞が属格語句の前に置かれる場合は(LLH)で発音される。

(94) a. * [[Chelswu (LL) caknyeney (LLH) ilpwon-ey (LLL) ka-n (L)] nal (H)]
Chelswu-主格 昨年 日本-へ 行く-連体形.過去 日
「Chelswu の昨年日本へ行った日」

b. [[Chelswu (LL) caknyeney (LLL) ilpwon-ey (LLL) ka-n (L)] nal (H)]
Chelswu-主格 昨年 日本-へ 行く-連体形.過去 日
「Chelswu の昨年日本へ行った日」

c. [[caknyeney (LLH) Chelswu (LL) ilpwon-ey (LLL) ka-n (L)] nal (H)]
昨年 Chelswu-主格 日本-へ 行く-連体形.過去 日
「昨年 Chelswu の日本へ行った日」

この章では、延辺朝鮮語の属格主語を含む節には、日本語と同様に他動性制約の影響が及び、対格を伴う直接目的語が許されないことを検証した。前の章で延辺朝鮮語の主格と属格のピッチアクセントについて詳細に議論していおり、主語が L-型ピッチである方は属格主語であることを指摘したが、関係節の主語の L-型ピッチは属格主語であり、連体形のピッチアクセントの規則が適応され、単なるピッチアクセントに変化をもたらしたものでないことは、他動性制約の性質からも上手に説明される。なぜなら、連体形ピッチアクセント規則に従えば、関係節に現れる主語名詞句は、主要名詞の左の要素が L-型ピッチであれば、文の大きさに関係なく許されるはずなのに、実際は対格を伴う直接目的語が現れると L-型ピッチの名詞句が非文になることから、その L-型ピッチの名詞句が属格主語であり、対格を伴う直接目的語と共起できないという他動性制約でなければこの現象は説明できないからである。このピッチアクセント規則が統語論の理論的にどう解釈されるべきかは、一先ず置いておくが、ここで重要なことは、関係節における主語の二種

類のピッチアクセントで属格主語の時の L-型ピッチの時は、(90-93)で示したように対格を伴う直接目的語や非項を許していないことである。

以上、本節では延辺朝鮮語の主格・属格交替に他動性制約があることを確認した。また、属格主語文だけ述語連体形におけるアクセント規則が適応されることが明らかになった。尚、上記のアクセント規則と属格主語との関連性については今後の課題に残し、この辺りで次の節に進むことにする。

5.4. 裸の目的語

5.4.1. 中期朝鮮語

中期朝鮮語の属格主語は対格を伴う直接目的語より対格を伴わない裸の目的語(bare object)と共起する例が高い頻度で観察される。Sugai (2004)では 2 つの代表的な中期朝鮮語の文献、『釋譜詳節』(1447)及び『三綱行実図諺解』(1481)を対象に調査し、全体の目的語が現れる数値の中で、対格を伴わない目的語の割合について報告している。その調査によると、裸の目的語が主節の中では 276 個の中の 11.6%と低い割合になるが、関係詞および*-om* 節では、それぞれ 60 個の中の 91.7%、また 160 個の中の 82.5%と高い割合になる。

Sugai の調査では関係節及び*-om* 節の主語に見られる格が主格か属格かについて、報告されていない。だが、少なくとも中期朝鮮語の関係節及び*-om* 節などを含む名詞節で目的語が、対格を伴う傾向にあることが示されている。中期朝鮮語の関係節と*-om* 節において、裸の目的語の出現頻度が高いのは興味深いことである。本研究でも、同様にこれらの節が属格主語を含む場合に、裸の目的語と共に現れる例を多数発見している。以下の(95-98)は属格主語を含む関係節に裸の目的語が存在される例である。

(95) [[SWUTAL-oy CENGSA-∅ ciz-wu-lx] ceki][20]

須達-属格 精舎 立てる-W0-連体形.将来 時

（日本語訳）「須達の精舎を立てる時」(釋詳 6:40a) (Suh 1977, (158))

(96) [[CWOTAL-oy cywung-∅ hoyabori-n] cwoy] kothoya

調達-属格 お坊さん 傷つける-連体形.過去 罪-(と) 同じく...

（日本語訳）「調達がお坊さんを傷つけた罪と同じく...」(釋詳 21:31a)

(97) [[CHENGKWONG-oy kul-∅ nllk-te-n] cip]

陳公-属格 字 読む-回顧-連体形.過去 家

（日本語訳）「陳公が勉強していた家」(杜詩 3:63b)

(98) [[PWONG-oy am-∅ kuho-non] ptut]

鳳-属格 メス 探す-連体形.現在 意味

（日本語訳）「鳳がメスを探す意味」(杜詩 3:73b)

(95)の関係節は属格主語 *Swutal* と裸の目的語 *CENGSA*「精舎」を含み、(96)も属格主語 *Cwotal* と裸の目的語 *cywung*「お坊さん」を含んでいる。同じく、(97)は属格主語 *CHENGKWONG* と裸の目的語 *kul*「字」が現れ、さらに、(98)は属格主語 *PWONG*「鳳」と裸の目的語 *am*「メス」が共起している。

又、主格主語を含む関係節(99)や *-om* 節(100)でも、裸の目的語を含む例が発見されている。

[20] 訓民正音公布以降 1465 年の『円覚経諺解』以前の中期朝鮮語文献では連体形語尾 *-l* は *-l/-lx* の二つの形で実現する。

(99) [[CEY-PUL-i SINLEYK-∅ natwo-s-i]-lx SICEL]

複数-釈迦-主格 神力 見せる-WO-敬語-接尾詞-連体形.将来 時節

「お釈迦様たちが神力を見せる時節」(釋詳 19:39b)

(100) [SINHA-i nimkum-∅ syemky-wom]-i

臣下-主格 王様 補助する-名詞化-主格

[CASIK-uy PUMO-∅ syemky-wom]-i kotho-ni

子供達-属格 父母 扶養する-名詞化-主格 同じだ-終止

「臣下が王様を補助することは子供達が親を扶養することと同じである.」

(三綱 Lenten, 49)

(99)の関係節では、主格主語 *CEYPUL*「お釈迦様たち」、動詞 *natosi-*「見せる」と裸の目的語 *SINLEYK*「神の力」が共に現れる。また、(100)の*-om* 節でも、主格主語と属格主語が裸の目的語と共起している。最初の*-om* 節には、主格主語 *SINHA*「臣下」と目的語 *nimkum*「王」が出現し、次の*-om* 節には、属格主語 *CASIK*「子供」と目的語 *PUMO*「父母」が現れている。

以上の例の関係節及び*-om* 節には、主格主語と属格主語と共に、裸の目的語が含まれている。また、上記の中期朝鮮語の裸の目的語はすべて述語のすぐ隣の位置に現れ、隣接性があるように思われる。この中期朝鮮語の裸の目的語の性質は、次節で紹介する延辺朝鮮語の現象とも類似する点がある。では、続けて延辺朝鮮語の裸の目的語の性質及びその分析について考察する。

5.4.2. 延辺朝鮮語の裸の目的語及び分析

既に、延辺朝鮮語の主格・属格交替において、関係節内の対格を伴う直接目的語が現れる場合に、交替が許されないことについて述べたが、裸の目的語の場合の時は、主格・属格交替が許される。以下の(101-103)は主格・属格交替が生じる節に裸の目的語が現れる例である。

(101) a. swunhi-nu (HLL) [[Yengchel-i (LHL) pap-∅ (L) mek-ul (LL)] sikan]-ey (LHL)

Swunhi-話題 Yengchel-主格 ご飯 食べる-連体形.将来 時間-に

wo-n-da (HL).

来る-時制-終止

「Swunhi は Yengchel がご飯を食べる時間に現れる。」

b. swunhi-nu (HLL) [[Yengchel-i (LLL) pap-∅ (L) mek-ul (LL)] sikan]-ey (LHL)

Swunhi-話題 Yengchel-属格 ご飯 食べる-連体形.将来 時間-に

wo-n-da (HL).

来る-将来-終止

（日本語訳）「Swunhi は Yengchel がご飯を食べる時間に現れる。」

(102) a. [[achim-ey (LLH) emeni (LLH) cwuk-∅ (L) mantu-l (LL)] sikan]-ey (LHL)

朝 お母さん.主格 お粥 作る-連体形.将来 時間-に

na-nu (HL) ca-n-ta (HL).

私-話題 寝る-時制-終止

「朝お母さんがお粥を作る時間に私は寝ている。」

b. [[achim-ey (LLH) emeni (LLL) cwuk-∅ (L) mantu-l (LL)] sikan]-ey (LHL)

朝 お母さん.属格 お粥 作る-連体形.将来 時間-に

na-nu (HL) ca-n-ta (HL).

私-話題 寝る-時制-終止

（日本語訳）「朝お母さんがお粥を作る時間に私は寝ている。」

(103) a. na-nu (HL) [[Chelswu (HL) chayk (L)-∅ sa-n (L)] secem]-ey (HLL)

私-話題 Chelswu-主格 本 買う-連体形.過去 本屋-に

ka-ss-ta (HL).

行く-過去-終止

「私は Chelswu が本を買った本屋に行った。」

b. na-nu (HL) [[Chelswu (LL) chayk (L)-∅ sa-n(L)] secem]-ey (HLL)

私-話題 Chelswu-属格 本 買う-連体形.過去 本屋-に

ka-ss-ta (HL).

行く-過去-終止

（日本語訳）「私は Chelswu が本を買った本屋に行った。」

上記の例において、延辺朝鮮語で裸の目的語が関係節の内部に存在しても主格・属格交替が許される。

Yanagida and Whitman (2009)で、古日本語(Old Japanese)における裸の目的語の分析をしている。Yanagida and Whitman によると、裸の目的語が枝分かれをしない名詞(non-branching noun)であること、また、述語と隣接性がある場合に、裸の目的語が述語に名詞抱合すると分析している。この名詞抱合に必要な二つの条件は延辺朝鮮語の裸の目的語においても当てはまる。

最初に、延辺朝鮮語において、裸の目的語と述語の間の隣接条件について調べてみる。以下の例で、延辺朝鮮語の裸の目的語は、述語の間に他の要素である副詞がある場合、非文になり、隣接性が課されていることが伺える。(104)において、裸の目的語と述語の間に副詞 *mani*「たくさん」が存在すると非文になるが、対格が付いている目的語と述語の間に副詞が存在しても非文にならない。

(104) a. * [[pap (L)-∅ <u>mani(LL)</u> mek-nun (LL)] salam (HL)]

米 たくさん 食べる-連体形.現在 人

「米をたくさん食べる人」

b. [[pap-u (LL) <u>mani (LL)</u> mek-nun (LL)] salam (HL)]

米-対格 たくさん 食べる-連体形.現在 人

「米をたくさん食べる人」

次に、延辺朝鮮語の裸の目的語が枝分かれをしない名詞句である時だけ許されることを見る。裸の目的語が(105a)のように形容詞に修飾されたり、(105b)のように名詞に修飾されたりする時は、非文であるが、(106)のように、目的語に対格 *-u* が付いたら、裸の目的語が枝分かれしても非文にならない。

(105) a. * [[<u>masiss-nun (LLL)</u> cwuk (L)-∅ mantu-l (LL)] sikan(LH)]

おいしい-連体形 お粥 作る-連体形.将来 時間

「おいしいお粥を作る時間」

b. * [[<u>wulicip (LLL)</u> ssal (L)-∅ hwumchi-n(LL)] twodwoki(LLH)]

我が家-属格 米 盗む-連体形.過去 泥棒

「我が家の米を盗んだ泥棒」

(106) a. [[masiss-nun (LLL) cwuk-u(LL) mantu-l (LL)] sikan (LH)]

おいしい-連体形 お粥-対格 作る-連体形.将来 時間

「おいしいお粥を作る時間」

b. [[wulicip (LLL) ssal-u (LL) hwumchi-n (LL)] twotwoki (LLH)]

我が家-属格 米-対格 盗む-連体形.過去 泥棒

「我が家の米を盗んだ泥棒」

(105a)では裸の目的語 *cwuk*「お粥」を修飾する形容詞 *masissnun*「おいしい」があり、(105b)では属格語句 *wulicip*「我が家」が裸の目的語 *ssal*「米」を修飾しているために、裸の目的語は枝分かれをする名詞句になるため、文が非文になると考えられる。

以上から、(104-106)で延辺朝鮮語の裸の目的語には述語との隣接性が課されており、枝分かれをしない名詞句であることが分かった。このような性質が見られるということは、Yanagida and Whitman (2009)が古日本語で分析しているように、延辺朝鮮語でも、目的語が述語に結合している可能性が高い。したがって、裸の目的語が枝分かれをする名詞句になっている以下の(107)において、文法性が下がり、特に属格主語の方では非文になる。(107)では主格主語の方も完璧に自然な文と言えないが、属格主語の場合よりは良く感じる。その理由は(105)の例を使って述べたように、裸の目的語は枝分かれをしない名詞句の性質が関与していると考えられる。一方、以下の(107a,b)で、(107b)の属格主語を含む節のほうが(107a)の主格主語を含む節より文法性が下がる理由は、枝分かれする裸の目的語は動詞に名詞抱合できず、対格を必要とするため、属格主語を含む節では他動性制約の違反になるからである。一方、主格構文は他動性制約と関係ないため、文法性が極端に落ちることはない。

(107) a. ?emeni (LLH) masissnun (LLL) cwuk (L)-∅ mantu-l (LL) sikan (LH)

お母さん.主格 おいしい お粥 作る-連体形.将来 時間

「お母さんがおいしいお粥を作る時間」

b. * emeni (LLL) masissnun (LLL) cwuk (L)-∅ mantu-l (LL) sikan (LH)

お母さん.属格 おいしい お粥 作る-連体形.将来 時間

「お母さんがおいしいお粥を作る時間」

以上のように、延辺朝鮮語で(108)((101)の再掲)の構造を(109)で表示するように裸の目的語は述語に結合(抱合)する。Baker (1988)によると、述語に結合する裸の目的語は格を必要としないため、格認可の条件に違反しない。つまり、(108)の裸の目的語は対格をもらわなくても許されるので、他動性制約の違反にならないため、延辺朝鮮語で裸の目的語は、他動性制約の違反を起している対格を伴う直接目的語とは同様に扱うことができないのである。

(108) a. [[Yengchel-i (LHL) pap-∅ (H~L) mek-ul (LL)] sikan (LH)]

Yengchel-主格 ご飯 食べる-連体形.将来 時間

「Yengchel がご飯を食べる時間」

b. [[Yengchel-i (LLL) pap-∅ (LL) mek-ul (LL)] sikan (LH)]

Yengchel-属格 ご飯 食べる-連体形.将来 時間

（日本語訳）「Yengchel がご飯を食べる時間」

(109) a. [$_{DP}$ [$_{NP}$ [$_{CP/TP}$ Yengchel-i (LHL) pap-∅ mek-l] $_{N}$ sikan (LH)] D]

b. [$_{DP}$ [$_{NP}$ [$_{CP/TP}$ Yengchel-i (LLL) pap-∅ mek-l] $_{N}$ sikan (LH)] D]

上記で示したように、名詞抱合は完全に自由ではなく、必要な条件が満たされたら可能な現象である。他動性制約の本質からは主格の認可において、目的語が対格の標示ができるのにも関わらず、(109a)の主格主語の場合でも裸の目的語が述語に結合するのは、名詞抱合に必要な条件が揃っているからだと考えられる。

中期朝鮮語の裸の目的語については更なる研究が必要であるが、本稿で見てきた例は、延辺朝鮮語と共通点がある。例えば中期朝鮮語の(95)の例を以下に(110)として再掲するが、裸の目的語CENGSA「精舎」は、動詞 *ciz-*「立てる」に隣接しており、さらに枝分かれをしない名詞句であることから、名詞抱合が可能であると考えられる。

(110) [[SWUTAL-oy <u>CENGSA</u>-∅ ciz-wu-lx] ceki]

須達-属格 精舎 立てる-W0-連体形.将来 時

（日本語訳）「須達の精舎を立てる時」(釋詳 6:40a) (Suh 1977, (158))

上の例から、中期朝鮮語の裸の目的語は上の条件を満たした場合は、述語に抱合し、対格を必要としないため、他動性制約の有無を論じる際に、対格を伴う直接目的語と同じように扱えない。今後の研究において、中期朝鮮語における他動性制約の有無における一般化を捉える上で重要なのは、中期朝鮮語の裸の目的語について調査を進め、名詞抱合の条件が満たされているかどうかを明らかにすることである。

5.4.3. 日本語の裸の目的語

日本語において、裸の目的語が主格・属格交替における関係節に存在する場合、以下のように関係節で主格主語しか許されない[21]。(111b)の属格主語を含む関係節では裸の目的語「ご飯」が現れると非文になる。

[21] これは何人かの母語話者による聞き込み調査によるデータである。

(111) a. [[昨日 ジョンが ご飯-∅ 食べた]店]

b. * [[昨日 ジョンの ご飯-∅ 食べた]店]

上記の日本語の裸の目的語が属格主語節で許されない理由は、以下の(112a)で示しているように、裸の目的語「ご飯」が副詞「たくさん」と述語の間に存在することが可能である。また、(112b)で示しているように、形容詞「おいしい」によって裸の目的語が修飾されることが可能であることから、裸の目的語は名詞抱合できない環境においても許される。

(112) a. [[昨日 ジョンが ご飯-∅ たくさん 食べた]店]

b. [[昨日 ジョンが おいしい ご飯-∅ 食べた]店]

以上から、日本語の裸の目的語は、中期朝鮮語と延辺朝鮮語とは違い、名詞抱合ではない統語環境によって認可されるので、対格を伴う目的語と同じく他動性制約の違反を引き起こしている。

5.5. まとめ

5 章では、主に中期朝鮮語及び延辺朝鮮語の他動性制約の有無について調査した。中期朝鮮語においては、*-om* 節で対格を伴う直接目的語が属格主語を含む節に存在しており、他動性制約の影響が見られなかったが、関係節では、属格主語と対格を伴う直接目的語を含んでいる節が観察されなかったので、他動性制約が影響を及ぼす可能性を指摘した。延辺朝鮮語では、関係節における対格を伴う直接目的語の存在が主格・属格交替を起こさないことから、他動性制約があることを検証している。さらに、本章で中期朝鮮語と延辺朝鮮語では、対格を伴わない裸の目的語は名詞抱合によって対格を必要としないため、格を伴う直接目的語と同じように他動性制約の有無を論じることができないことを推察している。日本語における裸の目的語は、名詞抱合できない

ことから、対格を伴う目的語と同じく他動性制約の違反を引き起こしていると推測している。尚本章で調べている主格・属格交替の他動性制約をまとめたものが表 5 になる。

表 5.　諸言語の主格及び属格語句における可否

言語	日本語	中期朝鮮語		延辺朝鮮語
Clause type / Subject type	関係節	関係節	*-om* 節	関係節
[Sub-NOM　Obj-ACC　V]	✓	✓	✓	✓
[Sub-GEN　Obj-ACC　V]	*	*	✓	*
[Sub-NOM　Obj-∅　V]	✓	✓	✓	✓
[Sub-GEN　Obj-∅　V]	*	✓	✓	✓

（可：✓、否：*）

第 6 章　中期朝鮮語及び延辺朝鮮語の他動性制約に関する理論的な説明

本章では、主格・属格交替が許される日本語、中期朝鮮語、延辺朝鮮語における他動性制約の性質の有無に関する前章での観察から得た結果(表 6)に基づいて、先行研究での格認可の理論を基に統一的な説明を行う。6.1 では仮説を立て、6.2 では延辺朝鮮語と日本語の主格・属格交替の比較から、属格主語の認可を仮定し、他動性制約の影響が観察される例について説明を行う。6.3 では中期朝鮮語の *-om* 節とトルコ語を比較し、中期朝鮮語における属格の認可を仮定し、他動性制約の欠如について分析する。

表 6.　諸言語の主格・属格交替における他動性制約の有無

	日本語	現代朝鮮語	中期朝鮮語		延辺朝鮮語
主格・属格交替	有	無	有		有
構文	関係節		(*-om* 節)	関係節	関係節
他動性制約	有		無	有	有

6.1.　仮説

諸言語の主格・属格交替における主格・属格・対格などの認可を統一的に説明するために、格の認可に必要な条件を仮定する。以下の(113)は格の認可に関する Miyagawa (1993, 2003, 2011) などでの仮定を参考に提示している。

(113) a. An argument must have Morphological case and Abstact case. (null arguments and *pro* only need Abstract case.) (Miyagawa 2003)

b. Morphological case (nominative, accusative) are solely licensed by non-defective T.

c. T is non-defective iff T is the head of the complement of a phase head C.

d. Genitive case is licensed by phase head which has [Nominal] feature. D is a phase head and inherently [Nominal].

e. Abstract case is assigned by a phase head. Phase heads include D, C, and *v*.

f. Case assignment is subject to minimality.

g. X assigns Abstract case to Y iff X c-commands Y at some point of derivation.

上記の仮定において、格の認可がすべての名詞句に適用され、形態格(Morphological case)と抽象格(Abstract case)をもらわなければならないことを規定している。名詞句の抽象格は、近い主要部から認可される。形態格の認可については、更に説明を行う。ここでは主格と対格の形態格は「完全なる(non-defective) T」から認可されると規定している。「完全なる T」というのは、格を与える能力がある T のことを指す。一般的に、格を与える能力というのは C にあると考えられ、Chomsky (2008)で提唱された素性継承(feature inheritance)に基づき、C から T に受け継がれることで、T に格を与える能力が生じる。Pesetsky and Torrego (2002)の理論から言うと C に格を与える能力があるかないかは T に格を与える能力と関係するが、ここでは Miyagawa (2011)の理論に基づき、T の格認可能力は±C によって決まると仮定している。つまり、節が+C の時に、T は完全なる T であり、格(形態格・抽象格)を与える能力を有するが、–C の時は「不完全な(defective) T」であり、格を与える能力がない。後で議論するように、延辺朝鮮語では定時制(finite tense) *-ass* が関係節に現れると、属格主語が許されないことから、属格主語を含む関係節は格を与える能力

が欠けている TP であると仮定する[22]。

また、属格は形態格を[Nominal]の性質をもつ主要部から認可される。具体的には、属格主語は[Nominal]の性質を持っている主要部 D 或いは C からもらうことが理論的に可能であるが、延辺朝鮮語は、日本語と同じく他動性制約があり、また必ず主要名詞がある関係節でしか属格主語を許さないことから、日本語の Miyagawa (1993)の D による認可が適していると考えている。他動性制約の影響が観察されない中期朝鮮語の *-om* 節に関しては、トルコ語の *-dik-*名詞化従属節と類似するため、トルコ語の属格主語の認可と類似すると仮定している。トルコ語は[Nominal] C による認可と分析している Miyagawa (2011), Kornfilt and Whitman (2012)などの分析を参考にする。それでは(113)の仮定から日本語、中期朝鮮語、延辺朝鮮語でどのように格の認可が行われるか説明を行う。

6.2. 日本語及び延辺朝鮮語の他動性制約の分析

日本語の属格主語の認可の仕組みは大きく分けて Miyagawa (1993, 2011)の D 認可及び Hiraiwa (2001)の C 認可の二つの提案が存在する。延辺朝鮮語の主格・属格交替は常に主要名詞が存在する関係節で許されるのに加えて、以下に示すように、Miyagawa (1993, 2011)の D 認可による分析を支持する証拠があるため、本研究では Miyagawa の D 認可による分析を基に説明を試みる。

まず、Hiraiwa (2001)は、主格・属格交替は、Miyagawa (1993)の D 認可及び Wanatabe (1996)の wh-agreement と無関係に述語動詞連体形により認可されると主張している[23]。以下の(114)の例は、主要名詞のない連体形構文である。Hiraiwa は、「そのまで」が許されないことから、「ま

---

[22] 上記の仮定では、すべての名詞句は形態格と抽象格が与えられなければならないと仮定しているが、名詞抱合する裸の目的語の場合は、形態格・抽象格を必要としないと考えているので、例外になる。

[23] Maki and Uchibori (2008)では i) で示しているように主名詞が表面上に見えない述語動詞連体形において「時」、「時間」などの隠された(covert)名詞が存在する可能性を追及し、議論している。

i) ジョンは[[雨が/の 止む] (時/時間)まで] オフィスにいた。

で」が明らかに名詞ではないことを指摘している。なぜなら、名詞句を修飾する代名詞の「その」は、名詞句を修飾することができ、例えば「その本」は言えるからである。

(114) a. ジョンは[[雨が 止む]まで] オフィスにいた。

b. ジョンは[[雨の 止む]まで] オフィスにいた。

一方、延辺朝鮮語の述語連体形は、必ず主要名詞を必要とし、日本語の(114)に当たる以下の延辺朝鮮語では、「まで」の前に必ず主要名詞 *ttay*「時」が現れる。以下の(115)で *ttay* がない場合、非文になる。延辺朝鮮語で限定詞 ku は ku chayk「その本」のように名詞を修飾することができるが、ku ttay「その時」などが言えることから *ttay* は名詞であることは確かである。

(115) a. John-unu (HL) [pi (H)/pi (L) kkunh-ul (LL)] ttay-kkaci (HLL)

ジョン-話題 雨-主格/属格 止む-連体形.将来 時-まで

samwusi-ey (LHLL) iss-ess-ta (LHL).

オフィス-に いる-過去-終止

「ジョンは雨が/の止む時までオフィスにいた。」

b. * John-un (HL) [pi (H)/pi (L) kkunh-ul (LL)]-kkaci (LL)

ジョン-話題 雨-主格/属格 止む-連体形.将来-まで

samwusi-ey (LHLL) iss-ess-ta (LHL).

オフィス-に いる-過去-終止

「ジョンは雨が/の止むまでオフィスにいた。」

また、Watanabe (1996)では日本語の主格・属格交替が Wh 移動による認可によるものだと分析しているが、延辺朝鮮語では Wh 移動の痕跡がない関係節である-*cwu*/-*kes* 節でも、主格・属格交替が許されることから、Wh 移動による認可の仕組みは適していないことが考えられる。以上

のように、延辺朝鮮語の属格主語の認可の分析には、Hiraiwa (2005)、Watanabe (1996)による C 認可では説明が付かないことが分かる。以後示すように、Miyagawa (1993, 2011)での D による認可のほうが適しているため、D 認可の方をここでは採択する方針を取る。

Miyagawa (2011)では、主格主語は C によって認可され、属格主語は D によって認可されると主張している。Miyagawa は日本語の主格主語を含む節が CP であることに対し、属格主語を含む関係節、複合名詞句などは CP でなくそれより小さい TP であると指摘している。

(116) Prenominal clauses (relative clause and noun-complement clause) can be CP or smaller than that.

それでは、(116)の仮説と(113)の仮定に基づいて、日本語の属格主語と主格主語がどのように認可されるか説明する。まず、日本語の属格主語が許される例(117)を構造で表すと、(118)になる[24]。

(117) [ジョンの e_i 買った] 本 $_i$]

(118) [$_{DP}$ [$_{NP}$ [$_{TP}$ [$_{vP}$ ジョンの e_i 買- v]T $_{[defective]}$ った]$_N$ 本 $_i$] D]

Abstract case licensing

Morphological case licensing

関係節は CP より小さい TP であることが可能である。なお、C が存在しないので、この(118)の節は不完全な T を有している。Miyagawa (2011)では日本語の属格主語文は Spec, TP への移動を促す EPP 素性が欠けているため、属格主語は Spec, TP に移動することができず、*v*P に留まると主張する[25]。また、属格主語 *John* は *v*P の中で、抽象格は一番近い主要部 *v* から認可され、形態

[24] 以後、図式化した構造において、点線は抽象格、実線は形態格の認可を表す。

[25] その説明については詳しくは Miyagawa (2011)を参照してほしい。また、Watanabe (1996)でも属格主語は vP の中に留まることを指摘している。

格は D が[Nominal]の性質を持っているため、D によって認可される。ちなみに、空範疇(empty category)も *v* から抽象格が与えられる。

次に、主格主語の認可について説明する。主格主語を含む例(119)を構造で表すと(120)になる。

(119)　[ジョンが　e_i 買った]　本 $_i$]

(120)　$[_{DP}\ [_{NP}\ [_{CP}\ [_{TP}$ ジョンが　$[_{vP}$　e_i　買-　$v]$ $T_{[non\text{-}defective]}$ った　$]$ $C]_N$ 本 $_i]$ D]

(120)の関係節は、(116)から CP にもなり得るので、主格主語 *John* に主要部 C から抽象格を与えられる。また、CP は C があることから、完全なる T を有するため、主語に形態格も与えられる。さらに、空範疇も *v* から抽象格が与えられる。

ここで、主要部 D は、主に属格主語だけを認可することしかできないことに注意されたい。それは、主格の抽象格を認可する力がある主要部の C あるいは D であるが、最短距離条件(Minimality Condition)によると、C が D より近いため、D は主格主語を認可することは許されないと考えられる。その一方、属格主語を含む(120)には C がないため、D が属格主語を認可する時に、C が「邪魔」しないので、D が属格主語を認可することができる。

上記で述べている Miyagawa (2011)の主格主語と属格主語を含んだ節の大きさの違いについて Miyagawa で提示する根拠を以下に紹介する。副詞の分類を用いた例(121)では、CP 副詞「幸いに」と属格主語は共に現れることができないが、TP 副詞「きっと」は主格主語とも属格主語とも共に現れることが可能である。(副詞の分類について Cinque (1999)を参考にしている。)

(121) a.　[[幸いに太郎 {が/*の}　読んだ]　本]

b.　[[きっと太郎 {が/の}　読んだ]　本]

延辺朝鮮語では、属格主語は関係節の中で定時制 *-ass* が存在すると許されないことから主格主語と属格主語の CP/TP の大きさの違いがあると見られる。以下に関係する(122-123)の例を示す。

(122) a. Swunhi-nu (HLL) [[wonul (LH) aytul-i (HLL) ka-ass-ul (LL)]
スンヒ-話題 今日 子供達-主格 行く-過去-連体形.将来
cwu]-lu (HL) al-ass-ta (LHL).
形式名詞-対格 知る-過去-終止
「スンヒは今日子供達が行くことを知った。」

b.* Swunhi-nu (HLL) [[wonul (LH) aytul-i (LLL) ka-ass-ul (LL)]
スンヒ-話題 今日 子供達-属格 行く-過去-連体形.将来
cwu]-lu (HL) al-ass-ta (LHL).
形式名詞-対格 知る-過去-終止
「スンヒは今日子供達の行くことを知った。」

(123) a. Swunhi-nu(HLL) [[wonul (LH) aytul-i (HLL) ka-l (L)]
スンヒ-話題 今日 子供達-主格 行く-連体形.将来
cwu]-lu (HL) al-ass-ta (LHL).
形式名詞-対格 知る-過去-終止
「スンヒは今日子供達が行くことを知った。」

b. Swunhi-nu (HLL) [[wonul (LH) aytul-i (LLL) ka-l (L)]
スンヒ-話題 今日 子供達-属格 行く-連体形.将来
cwu]-lu (HL) al-ass-ta (LHL).
形式名詞-対格 知る-過去-終止
「スンヒは今日子供達の行くことを知った。」

(122)で定時制 *-ass* が節の中に現れた場合に属格主語を含む(122b)は許されない。一方(123)のように時制が現れない場合は、主格主語と属格主語は両方とも許される。延辺朝鮮語の(122b)で定時制 *-ass* が埋め込み節に置いた場合に文が非文になるのは、埋め込み節に時制 *-ass* を含む節が CP なので、完全なる T を有し、主要部 C が邪魔をして、D が属格(形態格)を認可することが不可能になるからである。定時制を含まない(123)の場合は、主要部 C が存在しないため、属格の D からの認可が可能になる。

これまでの議論をまとめると、延辺朝鮮語の主格・属格交替は(115)で示しているように主要名詞がある場合で許されることから、D 認可による分析が適している。さらに、(122-123)の対比から、理論的に節の大きさに CP/TP の違いが生じる可能性を提示している。以上から、延辺朝鮮語においても関係節（*kes* 節、*cwul* 節も含まれる）を以下(124)のように仮定することができる。中期朝鮮語の関係節(形式名詞 *-kes* 節、*-to* 節も含まれる)では、他動性制約があることを予測し、主要名詞がある関係節で許される点において、延辺朝鮮語と類似する統語環境であることから、延辺朝鮮語と同じように仮定する。

(124) Prenominal clauses (relative clause) can be CP or smaller than that in Yanbian Korean and Late Middle Korean.

仮説(124)から、延辺朝鮮語の主格・属格交替における属格及び主格の認可は、上記で分析した日本語の場合と類似する。即ち、属格主語を含む節は CP より小さい節であることが可能であるため、主要部 D から形態格を付与される。同時に、属格主語は日本語と同じように、*v*P に留まるために、抽象格は *v* から認可される。一方、主格主語を含む節は CP でも可能なため、完全なる T から主格主語の形態格が付与される。また、主格主語は形態格を EPP 素性によって移動した後、一番近い主要部が C であるため、C から抽象格をもらう。

それでは、主格・属格交替における他動性制約の影響について説明を行う。日本語で他動性制約がある例を以下の(125)に再掲する。(126)は(125)の構造を図式化している。

(125) a. [[ジョンが 本を 買った] 店]

b. * [[ジョンの 本を 買った] 店]

(126) a. [$_{DP}$ [$_{NP}$ [$_{CP}$ [$_{TP}$ ジョンが [$_{vP}$ 本を 買- v] T$_{[non\text{-}defective]}$ った] C]$_{N}$ 店] D]

b. [$_{DP}$ [$_{TP}$ [$_{vP}$ ジョンの 本を 買- v] T$_{[defective]}$ った]$_{N}$ 店] D]

(126a)で主語「ジョン」は、EPP 素性によって Spec, TP に移動した後に、節は C が主要部をなす CP であるため、形態格を完全なる T からもらい、抽象格は一番近い主要部 C から与えられる。さらに、目的語「本」は、*v* から抽象格をもらい、形態格は完全なる T によって認可される。一方、(126b)では、属格主語「ジョン」は *v*P の中に位置したままであり、抽象格を一番近い主要部 *v* から与えられる。また、この文は CP より小さくて、C が存在しない TP のために、この節は不完全な T である。その故に、主語は形態格を[Nominal]の性質を有する D から受ける。しかしながら、目的語「本」は *v* から抽象格をもらうものの、完全なる T ではなく不完全な T しか存在しないために、形態格が認可されず、非文になる。

延辺朝鮮語の他動詞制約についても日本語と同様に説明できる、以下の例を体表例として用い、分析を示す。(127)は延辺朝鮮語の他動性制約を違反する例であり、(128)はその格認可を図式化したものである。

(127) a. [[wonul Chelswu (HL) chayk-u (LL) sa-n (L)] kwos (H)]

今日 Chelswu-主格 本-対格 買う-連体形.過去 場所

「Chelswu が本を買った店」

b. * [[wonul Chelswu (LL) chayk-u (LL) sa-n (L)] kwos (H)]

今日 Chelswu-属格 本-対格 買う-連体形.過去 場所

「Chelswu の本を買った店」

(128) a. $[_{DP}[_{NP}[_{CP}[_{TP}$ Chelswu-NOM $[_{vP}$ chayk-u sa- $v]$ $T_{[non\text{-}defective]}$ n] $C]_N$ kwos] D]

b. $[_{DP}[_{NP}[_{TP}[_{vP}$ Chelswu-GEN chayk-u sa- $v]T_{[defective]}$ $n]_N$ kwos] D]

(128a)の主格節は CP であることが可能である。また、主語 *Chelswu* は、Spec, TP に位置するので、形態格を完全なる T からもらい、抽象格は一番近い主要部 C から与えられる。さらに、目的語 *chayk* は、一番近い主要部 *v* から抽象格をもらい、形態格は完全なる T によって認可される。一方、属格主語文の(128b)は CP より小さい TP である。属格主語 *Chelswu* は、抽象格は v から、形態格は D から認可される。また、目的語 *chyak* は、抽象格を *v* から受けるが、この節は TP であるため、不完全な T である故に形態格をもらえない。なお、目的語は形態格をもらえなかったので、(128b)は非文になる。

最後に、中期朝鮮語の関係節では他動詞性制約が適用されると予測したが、もしこの提案が正しければ、延辺朝鮮語の分析と同じものが適用できるので、その説明は省略する。

6.3. 中期朝鮮語の他動性制約の欠如の分析

中期朝鮮語の主格・属格交替は*-om* 節で許され、他動性制約の影響が見られないが、この点においてトルコ語の*-dik* 名詞句節と似ている。トルコ語では、以下の(129)に示しているように属格で標示される主語は対格がついた目的語との共起が許され、他動性制約が観察されない。

(129) トルコ語（Kornfilt and Whitman 2012）

Hasan [uşağ-ın <u>oda-yı</u> temizle-diğ-in]-i söyle-di

Hasan 召使い-属格 部屋-対格 掃除する-名詞化-3 人称-対格 言う-過去（3 人称）

（日本語訳）「Hasan は召使いが部屋を掃除したと言った.」

Miyagawa (2011)では、トルコ語の属格主語を含む節が日本語と違い、他動性制約がないのは、節が C を有し、属格主語は([Nominal]) C によって認可されることを理由として挙げている。また、Kornfilt and Whitman (2012)では、トルコ語の属格主語は*-dik* 名詞化従属節で許されるが、*-dik* は定時制であり、且つ[Nominal]の性質をもっていることから、トルコ語は[Nominal]C によって認可されると指摘している。以下(130)で図式化しているように、(129)において、仮定(113)によって、*Hasan* は形態格を[Nominal]C によって認可され、抽象格も同じく近い主要部、[Nominal] C から認可される。また、C が存在するため、目的語の *oda* は対格の形態格を完全なる T から、抽象格は *v* から認可される。

(130) $[_{CP}[_{TP}$ <u>uşağ-ın</u> $[_{vP}$ <u>oda-yı</u> temizle <u>*v*</u>] T$_{[\underline{non\text{-}defecitive}]}$ –diğ -in] <u>C$_{[\underline{Nominal}]}$</u>]-i

中期朝鮮語の*-om* 節もトルコ語と同じく他動性制約がないことから、属格主語は[Nominal]C によって属格が認可されることが予想される。以上から中期朝鮮語の主格・属格交替における*-om* 節は以下のように仮定できる。

(131) a. The nominalizer *-om* are C in Late Middle Korean.

b. In Late Middle Korean, the C has [Nominal] feature.

(131)及び(113)の仮定に基づき、中期朝鮮語の*-om* 節で属格主語と主格主語の認可を以下のように分析する。中期朝鮮語で、以下の(132)で示されている主語に伴う主格及び属格に対して、認可仕組みを図式化したのが、(133)である。

(132) a. [UYKUN-i CHENGCENGh-wom]-i i-kotho-lssoy…

意根−主格 清浄する−名詞化−主格 このようだ−ので

「意根が清浄であることがこのようなので…」(月釋 17: 74a) (Suh 1977, (138))

b. [UYKUN-uy CHENGCENGh-wom]-i ireho-lssoy…

意根−属格 清浄する−名詞化−主格 この−ようだ−ので

「意根の清浄であることがこのようなので…」(釋詳 19: 25a) (Suh 1977, (139))

(133) a. $[_{NP}\,[_{CP}\,[_{TP}\,\underline{\text{UYKUN-NOM}}\,[_{vP}\,\text{CHENGCENGh-}\,v]\,T_{\underline{[non\text{-}defecitive]}}]\,_{\underline{C[Nominal]}}\,\text{om}]]$

b. $[_{NP}\,[_{CP}\,[_{TP}\,\underline{\text{UYKUN-GEN}}\,[_{vP}\,\text{CHENGCENGh-}\,v]\,T_{\underline{[non\text{-}defecitive]}}]\,_{\underline{C[Nominal]}}\,\text{om}]]$

上記の(133)の*-om* 節は[Nominal]C が主要部をなす CP であることが可能である。主格で標示される主語 *UYKUN* は、形態格を完全なる T から与えられる。また、主語は EPP 素性により、Spec,

TP に移動するので、抽象格は一番近い主要部[Nominal] C によって認可される。一方、属格で標示される *UYKUN* は Spec, TP に同じく移動して、[Nominal]C によって抽象格と形態格を共に認可される。

中期朝鮮語における属格主語の他動性制約の欠如に対する説明はトルコ語と同様なものが適用され、(134)を図式化すると(135)のようになる。

(134) [CENGHAKWONG-oy culumskilh_ulwo WOKCHAYK-ol

清河公-属格 近道で 玉冊-対格

CENh-wom]-ol masto-la.

伝える-名詞化-対格 逢う. 過去

（日本語訳)「清河公が近道で玉冊を伝えるのを逢う.」 (杜詩 24:13b)

(135) $[_{CP}[_{TP}$ CENGHAKWONG-oy $[_{vP}$ WOKCHAYK-ol *v*] $T_{[non\text{-}defective]}$] $C_{[+Nominal]}$ om]

(134)で属格主語 *CENGHKAWONG* は、抽象格・形態格を共に[Nominal]C から認可され、目的語 *WOKCHAK* は抽象格を一番近い主要部 *v* から与えられる。また、目的語の形態格は完全なる T から受けられる。以上のように、(135)では、目的語が形態格と抽象格をすべて認可され、他動性制約の影響が観察されない。最後に、主格主語の認可は、以下(136)のようになる。

(136) $[_{CP}[_{TP}$ NP-NOM $[_{vP}$ Obj-Acc V *v*] $T_{[non\text{-}defective]}$] $C_{[nominal]}$ om]

(136)において主格主語は、形態格を完全なる T からもらい、抽象格を[Nominal]C から認可される。目的語は抽象格を *v* から与えられ、形態格も完全なる T からもらうため、文法的である。

最後に、現代朝鮮語（ソウル標準語）に主格・属格交替が不可能なことについて簡単に述べる。本論文の分析の案から現段階で現代朝鮮語の属格主語が許されない理由が一つ挙げられる。すなわち、延辺朝鮮語では節の大きさが TP でも可能であり、属格主語は D から認可されるが、反対に、現代朝鮮語では節の大きさが常に CP であり、[Nominal] C でしか属格主語が認可されないという理由である。言語変化の過程で現代朝鮮語に[Nominal] C が許されなくなるのは、中期朝鮮語から現代朝鮮語に至る近代朝鮮語において朝鮮語に大きな変化があったことが考えられるが、この予測が正しいかどうかは、近代朝鮮語の調査を進めた上で具体的に実証していかなければならない。

6.4. まとめ及び問題点

6 章では属格の認可を最初に仮定した上、諸言語で他動性制約を有する場合と有しない場合の説明を行った。本章では、属格主語が[Nominal]性質をもっている主要部 D あるいは C から格を認可されると分析した。延辺朝鮮語の場合は、主格・属格交替が必ず主要名詞がある関係節、また形式名詞-*kes*/-*cwu* 節に限定されることから、D を主要部とする主要名詞を必要としていると提案し、属格が D によって認可されると主張した。さらに、定時制の-*ass* がある場合は延辺朝鮮語では属格主語だけ許されないため、属格主語を含む節は格を与える能力が欠けた不完全な T である可能性が高く、属格主語が現れる節は C がない TP のため、D からの認可が可能になることを提案する。延辺朝鮮語の属格主語を含む節で他動性制約があることについては、対格を伴う直接目的語の(形態)格認可は C があることを必要とするため、C がない属格主語を含む節では、格認可されず、非文になると説明した。一方、中期朝鮮語の-*om* 節は、トルコ語との比較によって属格主語が[Nominal]C から認可されることを仮定し、対格を伴う直接目的語は[Nominal] C の存在より、格認可を受けることができ、他動性制約が観察されないと説明した。

本研究では日本語やトルコ語の現象から、延辺朝鮮語や中期朝鮮語の現象を比較し、主格・属格交替及び他動性制約の有無を説明しているが、中期朝鮮語と延辺朝鮮語が日本語とトルコ語の言語現象と完全に一致していると言っているわけではない。例えば、[Nominal]C があると仮定している中期朝鮮語の *-om* 節には表面的に定時制が現れていない。また、延辺朝鮮語には日本語とは違い、連体形語尾 *-n*, *-l* が現れる。このような連体形語尾を C と分析している見方もある(Kaplan and Whitman 1995)。さらに、トルコ語の *-dik* 名詞化従属節では主語が常に属格に標示されるため、厳密な意味で主格・属格の格交替は存在しない。裸の目的語に関しても、日本語と朝鮮語は大きな違いを見せている。このような言語間の違いが、理論言語学的に何を意味するかはさらなる研究が必要とされる。

第 7 章.　帰結

本論文では、中期朝鮮語及び延辺朝鮮語の主格・属格交替について調査し、両言語には日本語と同じく主格・属格交替が許されることを明らかにした。特に、本研究は、主節及び関係節など名詞節に置いて、延辺朝鮮語の主格と属格がピッチアクセントと深く関連することを観察し、主格及び属格の具現化について、詳しく調べているのは本研究がおそらく初めてである。又、主格・属格交替にも、ピッチアクセントが関与していることを検証し、主格・属格交替の仕組みを含め、言語研究に新たな知見を与えた。また、中期朝鮮語の他動性制約については、*-om* 名詞化従属節で属格主語と対格を伴う直接目的語と同じ節で共に現れることから、他動性制約が影響を及ぼしていないことが分かった。一方、中期朝鮮語の関係節では、属格主語が対格を伴う直接目的語と共起する例が観察されなかったので、他動性制約の影響が及んでいると考えられる。また、延辺朝鮮語では、他動性制約を有することを検証している。

本研究を通じて、延辺朝鮮語は、主格・属格交替において、主格・属格交替が可能で他動性制約が観察される日本語とあらゆる面で似ていることが分かった。一方、中期朝鮮語は他動性制約を有する日本語に加えて、他動性制約を有していないトルコ語にも似ているという二つの側面があった。さらに、本研究では、他動性制約という性質から、対格の認可に焦点を当て、日本語とトルコ語、中期朝鮮語、延辺朝鮮語などを比較し、他動性制約の影響について説明を行った。このような延辺朝鮮語や中期朝鮮語の主格・属格交替における諸現象を通じて、アルタイ諸語の主格・属格交替現象における研究に新たな知見を与えることができたのではないかと考える。

影印・訳注本

世宗大王記念事業會. 2012. 譯註. 釋譜上節 21.

世宗大王記念事業會. 1991. 譯註. 釋譜上節 6, 9, 11.

世宗大王記念事業會. 1991. 譯註. 釋譜上節 13, 19.

許雄 李江魯. 1962.『月印千江之曲 上』. 新丘文化社.

延世大學校 東方學研究所. 1957.『月印釋譜 第十七』

東國大學校(4293)『世宗王朝 國譯藏經 妙法華經 全七卷』.

檀國大學校出版部. 1972.『南明泉繼頌諺解 下』.

弘文閣. 1984.『分類杜工部詩諺解 巻 7, 8, 16, 21』.

弘文閣. 1984.『分類杜工部詩諺解 巻 22, 23, 24, 25』.

デジタルハングル博物館 http://www.hangeulmuseum.org/

参考文献

Baker, M.C. 1988. Incorporation: A theory of grammatical function changing, University of Chicago Press Chicago.

Chomsky, N. 2008. On phases. In Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud, ed. Carlos Otero, Robert Freidin, and Mar´ıa-Lu´ısa Zubizarreta, 133–166. Cambridge: MIT Press.

Harada, S-I. 1971. Ga-No Conversion and Idiolectal Variations in Japanese. Gengo Kenkyu (Journal of the Linguistic Society of Japan) 60, 25-38.

Hiraiwa, K. 2001. On Nominative-genitive Conversion. In: Guerzoni, E., Matushansky, o. (Eds.), MIT Working Papers in Linguistics 39: A Few from Building E39, 66-125.

Ito, C and M Kenstowicz. 2009. Manfdarin Loanwords in Yanbian Korean II: Tones. Language

Research 45.1, 85-109.

Jang, Y-J. 1995. Genitive subject in Middle Korean. Harvard studies in Korean Linguistics VI: 223-224.

Jin, Y-J. 2011. Is Genitive Subject Possible in Modern Korean?. Japanese and Korean Linguistics 19, ed. by Ho-Min Sohn, Haruko Minegishi Cook, William O'Grady, Leon A.Serafim, and Sang Yee cheon, 111-124, CSLI Publications & SLA.

Jin, Y-J and Maki, H. 2013. The Genitive Subject in the Yanbian Variety of Korean: A Visual Analogue Scale Analysis. MIT Working Papers in Linguistics #67: Proceedings of the 8th Workshop on Altaic Formal Linguistics, ed. by Umut Özge, 153-158, MITWPL, Cambridge, MA.

Kang, B-Y. 2000. Sipwoseyki kwanhyengkwucwo Yenkwu (A Study of adnominal construction in the 15th Century Korean). Thayhaksa, Seoul.

Kaplan, T and Whitman, J. 1995. The category of relative clauses in Japanese, with reference to Korean. Journal of East Asian Linguistics 4, 29-58.

Kornfilt, J. 2003. Subject case in Turkish nominalized clauses. In: Junghanns, U., Szucsich, L. (Eds.), Syntactic Structures and Morphological Information. Mouton de Gruyter, Berlin/New York, 129-215.

Kornfilt, J and Whitman, J. 2012. Genitive subjects in TP Nominalizations. Proceedings of Jenom 4, Working Papers of the SFB 732??.

Ko, Y-K. 2010. Pyocwun Cwungseykwuke Mwunpeplwon (A general grammar of Late Middle Korean). Cipmwuntang.

Lee, K-M and Ramsey, S. R. 2011. A History of the Korean Language. Cambridge.

Maki, H. and A. Uchibori. 2008. Ga/no conversion. In S. Miyagawa and M. Saito, eds., The Oxford Handbook of Japanese Linguistics, 192-216. Oxford: Oxford University Press.

Miyagawa, S. 1993. Case-Checking and Minimal Link Condition. MIT Working Paper in Linguistics 19: Papers on Case and Agreement II, ed. C. Phillips, 213-254. Cambridge, MA.

Miyagawa, S. 2003. A-movement scrambiling and options without optionality. In S. Karimi. Ed. Word

Order and Scrambling. Blackwell Publishers.

Miyagawa, S. 2011. Genitive subjects in Altaic and specification of phase. Nominalizations in Syntactic Theory, Lingua, Special Issue, eds. J. Kornfilt & J. Whitman, Lingua 121, 1265-1282.

Ochi, M. 2001. Move-F and Ga/No conversion in Japanese. Journal of East Asian Linguistics 10, 247-286.

Pesetsky, D and Torrego, E. 2002. Tense, Case, and the Nature of Syntactic Categories. The syntax of Time. MIT press.

Ramsey, S.R. 1978. Accent and Morphology in Korean Dialects. Journal of Asian and Africa Studies19, 200-213.

Saito, M. 1982. Case marking in Japanese: A preliminary study. Ms., MIT.

Sohn, K-W. 2004. Nom-Gen Conversion as a Spurious Phenomenon. Hankwuk Cwungang Yenge Yengmwun Hakhoy (Journal of The English Language and Literature) 46 (4), 183-202.

Suh, J-M. 1977. Sipwoseyki Kwuke Swokkyek-uy Yenkwu (A Study of Genitive Case in the 15th Century Korean). Kwuko Yenkwu (The Korean Language research) 36, 65-81.

Watanabe, A. 1996. Nominative-genitive conversion and agreement in Japanese: A cross-linguistic perspective. Journal of East Asian Linguistics 5, 373-410.

Yanagida, Y and Whitman, J. 2012. Parameter Theory & Linguistic Change. Charlotte Galves, Sonia Cyrino, Ruth Lopes, Filomena Sandalo, Juanita Avelar (eds.) Oxford University Press. 177-195.

Yang, C-H. 2003. Dongmyengsa kuseng-uy '-o' yenku (A study of -o in Nominalization), Kukehak Congse (A series of Korean Linguistics) 44, Thaehaksa.

Yoon, H-S. 1996. Nominal gerund phrases in English as phrasal zero derivations. Linguistics 34, 329-356.

車香春. 2004. 朝鮮語龍井方言のアクセント体系. 東京大学言語学論集第 23 号, 1-22.

池鳳花. 2012. 延辺朝鮮語用言複合体のアクセント. 朝鮮語研究 5, 27-49. ひつじ書房.

福井 玲. 1999. アジア各地の朝鮮語の現状. 月刊言語, 100-106. 大修館.

平岩健. 2005. 主格/属格交替構文. 『新日本語の統合構造』第 12 章. 松柏社. 東京.

伊藤英人. 2012. 古代・前期中世朝鮮語における名詞化. 東京外国語大学論集第 85 号, 77-104.

李翊燮, 任洪彬. 1983. 『国語文法論』. 学研社.ソウル.

宮下尚. 2007.『言語接触と中国朝鮮語の成立』. 九州大学出版会. 福岡.

朴英梅. 2000. 日本言語学会 120 回大会発表予稿. 千葉大学.

梅田博之. 1993. 『中国周辺部における言語接触と社会変容（共同研究報告）』. 東京外国語外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

河須崎英之. 2012. 黒竜江省鉄力出身朝鮮語話者のアクセント. 朝鮮語研究 5, 7-25. ひつじ書房.

全学錫. 1988. Cwungsey cwosene-uy pangcemkua Yenkil, kaywencipangmal-uy kwocecangtan pikyo (中期朝鮮語の傍点と延吉, 開源地方話の高低長短との比較). 朝鮮語研究 2, 延辺人民出版社.